

## 「難民認定と記憶の限界」

### Refugee Status Determinations and the Limits of Memory

ヒラリー・エヴァンス・キャメロン (Hilary Evans Cameron)

*International Journal of Refugee Law* vol.22. no.4, pp. 469-511 (2010)

※本翻訳は、オックスフォード大学出版局（OUP）の許可を得て翻訳されたものです。

翻訳免責事項：OUP は、翻訳の正確性についていかなる形でも一切の責任を負いません。

本出版物における翻訳に関しては、ライセンス保持者である難民研究フォーラムのみが責任を負います。

※翻訳は RAFIQ 翻訳チームから提供を受けた訳文をもとに、難民研究フォーラムが作成しました。

「難民認定と記憶の限界」

Refugee Status Determinations and the Limits of Memory

ヒラリー・エヴァンス・キャメロン (Hilary Evans Cameron)※

*International Journal of Refugee Law* vol.22. no.4, pp. 469-511 (2010)

凡例

- ・著者による注釈は、原文の通り 1, 2, 3 のようにアラビア数字を用いてページごとに脚注を挿入した。訳者による補足や訳語の解説については、i, ii, iii のようにローマ数字を用いて文末脚注に示した。ただし、一部の用語の説明については、読みやすさを考慮して本文中に（訳注：）を用いて示した。
- ・筆者による引用は原則として「」を用いて表した。ただし、複数行にまたがる場合などは、例外としてイタリックを用いた。
- ・著者が強調の意味でイタリックにしている箇所は、代わりに下線を用いて表した。
- ・[]で挿入した箇所はいずれも訳者によるものである。原文で筆者が引用時に言葉を補っている場合は【】を用いて表した。
- ・難民認定審査にかかわる用語や心理学など特定の分野の専門用語などについては、初出時に（ ）を用いて原文を示した。
- ・注釈の出典情報は原則として、原文のまま示しているが、読みやすさを考慮して、ibid.は「同上」、および above n.X は「前掲注 X」に統一した。

目次

要旨	3
1.はじめに	3
2.有効性／利用しやすさ (Availability/Accessibility)	4
2.1 時間	4
2.2 日常的な物 (Common objects)	12
2.3 繰り返される出来事 (Repeated events)	13
2.4 周辺的な情報 (Peripheral information)	16
2.5 名前	19
2.6 逐語的記憶 (Verbatim memory)	20
3. 一貫性 (Consistency)	21
3.1 記憶の喪失 (Losses)	24
3.2 記憶の獲得 (Gains)	26
3.3 変容 (Distortions)	28
3.4 実験環境に関する注意 (A note about test conditions)	35
4. 結論	38

## 要旨

難民の地位の判断をする者 (Refugee Status decision makers : 以下、判断者<sup>i</sup>) は一般的に、人の記憶について筋違いな想定をしている。多くの人は、私たちの頭の中には経験した出来事のすべての側面が記録されていて、それらの記憶は脳に保存され、時間が経っても変化しないと考えている。しかし、何十年にもわたる心理学的研究により、トラウマやストレスによる記憶への影響を除いたとしても、人の記憶はそれほど完全でも堅固でもないことが明らかになっている。日付、頻度、継続時間、順序などの時間的情報、日常的な物 (common objects)、繰り返される出来事の個々の事例、周辺の情報、正式名称、交わした言葉一つ一つなど、すべての類の情報を正確に思い出すことは極めて困難である。また、私たちの自伝的記憶 (autobiographical memories) は時間とともに変化し、しかも大きく変わりうる。その結果、難民認定申請者の供述 (testimony) <sup>ii</sup> に食い違いや一貫性を欠く部分があると、信憑性において不利とみなされる場合があるが、そのような見地はたいてい誤解を導くもので、決して機械的に使用されるべきではない。その基準ははるかに低く設定されなければならない。不当で根拠に乏しい事実認定を避けようとするなら、多くの判断者は、申請者の記憶に対する考え方を根本的に見直さなければならない。

### 1.はじめに

「難民の地位の決定は、記憶力テストに基づいてなされるべきではない」<sup>1</sup>。

*“A refugee claim should not be determined on the basis of a memory test”*

難民の地位の判断をする者は一般的に、人の記憶について筋違いな想定をしている。例えば、カナダ移民・難民委員会 (Immigration and Refugee Board of Canada : 以下、IRB または委員会) の難民保護部門のメンバーは、「記憶とは、自分が見たことを思い出すために、自由に再生できるビデオ録画のようなものだ」という一般的な考え方に同意している<sup>2</sup>。しかし、トラウマやストレスによる記憶への影響を除いたとしても<sup>3</sup>、何十年にもわたる研究の結果、人間の記憶はビデオ録画のようなものではなく、一般的な考え方が示すような完全なものでも、堅固なものでもないことが疑いの余地なく立証されている。その[記憶に対する誤解の]結果、非常に多くの場合、判断者は不当で根拠のない結論を導き出すことと

---

※ヒラリー・エヴァンス・キャメロンはカナダの難民弁護士。トロント大学コミュニティリーガル・クリニックの「難民移民部門」を率いる (the Refugee and Immigration Division of the University of Toronto's community legal clinic)。

著者は、ジャネット・クリーヴランド博士、アンナ・パイプス、アンヌ・マクレア、エメット・オライリーおよびIJRLの匿名査読者に感謝する。

<sup>1</sup> *Sheikh v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2000] FCJ No. 568 at para. 28 (Federal Court of Canada).

<sup>2</sup> R. N. Haber & L. Haber, 'Experiencing, remembering and reporting events' (2000) 6 *Psychology, Public Policy and Law* 1057-97 at 1057.

<sup>3</sup> これは本稿の範囲を超える大きなテーマであるが、以下に述べる[記憶の]不一致や変化、一般的な記憶の特徴は、心理的に脆弱な人々が動揺するような経験を思い出し、関連づけるとき、特にストレスにさらされた状況下では増幅する傾向があるということは注目に値する。以下を参照のこと、J. Herlihy & S. W. Turner, 'The Psychology of Seeking Protection' (2009) 21 *IJRL* 171-92; J. Cohen, 'Errors of recall and credibility: Can omissions and discrepancies in successive statements reasonably be said to undermine credibility of testimony' (2001) 69 *Medico-Legal Journal* 25-34.

なる。

本稿の第一章では、難民の決定プロセスに関連してよくある記憶の不十分さ、すなわち時間の記憶（日付、期間、頻度、順序）、日常的な物、繰り返される出来事、周辺の情報、名称、および逐語的記憶を取り上げる。第二章では、記憶が時間とともにどのように変化するかを探り、最後に IRB でのテスト条件が、申請者の記憶の一貫性のなさの一因である可能性が高いことを指摘して結論づける。ここではすべてカナダの難民認定制度から例を挙げているが、本稿で指摘した点は他の国の難民認定制度にも同様に当てはまるだろう。

## 2.有効性/利用しやすさ (Availability/Accessibility)

ある種の情報は、私たちの記憶に記号化されていなかったり、されていても容易に利用できなかったりするものである。出来事の記憶を再構成する際に、人はこのような情報を正確に思い出すことは極めて困難である<sup>4</sup>。

### 2.1 時間

長年にわたる研究の結果、研究者たちは、物事を思い出す際に私たちは「ごくわずか時間的情報しか利用できない」という点で意見が一致している<sup>5</sup>。例えば出来事をかなり詳細に覚えていても、いつ、どのくらいの頻度で、どのくらいの期間、どのような順序で起こったのかについては、漠然としか思い出せないことには疑いの余地がない。

#### 2.1.1 日付

ある出来事を思い出す時、その日付はほとんどの場合「推論、推定、推測 (inference, estimation, and guesswork)」に基づいて割り当てられる<sup>6</sup>。「正解の手がかり」<sup>7</sup>が十分にあれば、その出来事がいつ起こったのかを思い出せるかもしれない<sup>8</sup>が、私たちの推測は手がかりと同程度のものでしかないと、ほとんど役に立たないことも多い。実際、多くの研究が示しているように、「人が過去の出来事に割り当てた日付が正確であることはほとんどない」のである<sup>9</sup>。

いくつかの研究では、自伝的な出来事 (autobiographical events) の日付を言い当てる能力は、他の種

---

<sup>4</sup> 心理学者は、私たちは記憶を思い起こすたびに記憶を再構築していると理論化している。「最近の記憶に関する理論は、記憶とは、これまで考えられていたような保存された情報の単位ではなく、出来事や情報を思い起こすことは再構築のプロセスであることを示唆している」。前掲注 3 Herlihy 2009, 179.

<sup>5</sup> C. D. B. Burt, 'Time, language, and autobiographical memory' (2008) 58 *Language Learning* 123-41 at 123 (Burt, Time). 以下を参照のこと。W. J. Friedman, 'Memory for the time of past events' (1993) 113 *Psychological Bulletin* 44-66.

<sup>6</sup> G. Cohen & R. Java, 'Memory for medical history: Accuracy of recall' (1995) 9 *Applied Cognitive Psychology* 273-88 at 274; 以下も参照のこと、J. J. Skowronski & C. P. Thompson, 'Reconstructing the dates of personal events: Gender differences in accuracy' (1990) 4 *Applied Cognitive Psychology* 371-81.

<sup>7</sup> N. R. Brown, L. J. Rips & S. K. Shevell, 'The subjective dates of natural events in very-long-term memory' (1985) 17 *Cognitive Psychology* 139-77 at 172.

<sup>8</sup> 以下を参照のこと、A. L. Betz & J. J. Skowronski, 'Self-events and other-events: Temporal dating and event memory' (1997) 25 *Memory & Cognition* 701-14.

<sup>9</sup> 前掲注 5 Burt, Time 2008, 129; 前掲注 66; Skowronski 1990, 377; 参照 S. M. J. Janssen, A. G. Chessa & J. M. J. Murre, 'Memory for time: How people date events' (2006) 34 *Memory and Cognition* 138-47.

類の出来事の場合よりも高い可能性が示されている<sup>10</sup>。そうであっても、例えば、被験者<sup>iii</sup>が4ヶ月間の日記をつけた後に、自分が記述した出来事の日付を尋ねられると、記憶と実際の日付との間に最大で3ヶ月の食い違いが生じることが頻繁に起こる<sup>11</sup>。ある研究によると、被験者が3ヶ月間にわたって自分の健康状態を記録した後に、特定の病気や疾患にかかった日付を尋ねたところ、実際の日付と2週間以内の誤差で回答できた人は半分程度に過ぎなかった<sup>12</sup>。これまでのすべての研究で「一貫している結論」は、「2週間ほど経つと、個人が過去の経験の日付を正確に特定することが難しくなり、発生した日付の情報は通常、記憶に保持されないことを示唆している」<sup>13</sup>ということである。そして、その困難さは時間の経過とともにさらに高まる<sup>14</sup>。

いくつかの研究では、非日常的で記憶に残る出来事の日付は、そうでないものに比べると正確に記憶されることが示唆されている<sup>15</sup>。しかし、他の研究では、このような出来事は、おそらく他の出来事よりはっきり覚えているために、実際よりも最近に起こったと思いつく傾向があることなど、ある一定の日付にかかわるバイアスに影響されやすいことが指摘されている<sup>16</sup>。また、日常的な出来事の日付を記憶する能力と、出来事の日付を記憶する能力の間には大きな差がないとする研究もある<sup>17</sup>。いずれにしても、非日常的で個人的な出来事でさえも、「かなりの」日付の特定の誤り（‘massive’ dating errors）が起こり得る<sup>18</sup>。例えば、ある研究では、大腸がん検査や子宮頸部の塗抹標本検査など、2～6ヵ月前にいくつかの侵襲的医療処置を受けた被験者らは、その日付を正しく思い出すことが非常に困難であった。多くの被験者は、これらの医療行為を過去2ヵ月以内に受けたと誤って報告している。つまり、これらの推測が実際の日付から最大4ヵ月もずれていたことを意味している<sup>19</sup>。

私たちは、社会的な出来事（public events）の日付を記憶しておくのはさらに難しいようである。爆

---

<sup>10</sup> 前掲注 8 Betz 1997; S. F. Larsen & C. P. Thompson, ‘Reconstructive memory in the dating of personal and public news events’ (1995) 23 *Memory & Cognition* 780-90.

<sup>11</sup> C. P. Thompson, ‘Memory for unique personal events: The roommate study’ (1982) 10 *Memory & Cognition* 324-32 at 324; 以下も参照のこと、M. S. Shum, ‘The role of temporal landmarks in autobiographical memory processes’ (2000) 124 *Psychological Bulletin* 423-42 at 435.

<sup>12</sup> 前掲注 6 Cohen 1995.

<sup>13</sup> 前掲注 5 Burt, *Time* 2008, 129; W. A. Wagenaar, ‘My memory: A study of autobiographical memory over six years’ (1986) 18 *Cognitive Psychology* 225-52; M. Linton, ‘Memory for real-world events’ in D. A. Norman & D. E. Rumelhart (eds.), *Explorations in cognition* (San Francisco: 1975), 376-404 in Burt, *Time* 2008, 前掲注 5.

<sup>14</sup> C. R. Barclay & H. M. Wellman, ‘Accuracies and inaccuracies in autobiographical memories’ (1986) 25 *Journal of Memory and Language* 93-103 at 100; C. P. Thompson, J. J. Skowronski & D. J. Lee, ‘Telescoping in dating naturally occurring events’ (1988) 16 *Memory & Cognition* 461-8; 前掲注 6 Cohen 1995, 284; W. J. Friedman, ‘Time in autobiographical memory’ (2004) 22 *Social Cognition* 591-605.

<sup>15</sup> 前掲注 8 Betz 1997, 711.

<sup>16</sup> 前掲注 7 Brown 1985.

<sup>17</sup> B. Means & E. F. Loftus, ‘When personal history repeats itself: Decomposing memories for recurring events’ (1991) 5 *Applied Cognitive Psychology* 297-318.

<sup>18</sup> E. F. Loftus, M. R. Klinger, K. D. Smith & J. Fiedler, ‘A tale of two questions: Benefits of asking more than one question’ (1990) 54 *Public Opinion Quarterly* 330-45 at 339-40.

<sup>19</sup> 同上。この研究にコメントしたある研究チームは、これらの誤りは、「特定の出来事が発生した日付の推定における誤り」よりも、次節で述べるように、「ある期間に発生した出来事の頻度の過大評価」によって生じた可能性が高いことを示唆している。前掲注 14 Thompson 1988, 461. いずれにせよ、被験者の日付の推定は著しく不正確であったという結果は同じである。

弾テロや政治家の暗殺など「最近起こった重要な出来事」<sup>20</sup>や、センセーショナルなメディアの出来事の日付を特定することさえも、である。被験者らに過去5年間に起きた社会的な出来事の日付を尋ねたある研究によると、被験者の推測は平均で11か月のずれがあったという<sup>21</sup>。また、O.J.シンプソン（O.J. Simpson）の評決から8ヵ月後に、その裁判を見て、判決に少なくともある程度の感情移入をしたと答えた人たちに、その出来事の日付を尋ねた研究がある。被験者には、5ヵ月過少に見積もった回答者から、34ヵ月も過剰に見積もった回答者まで幅があった。8ヵ月前に起こった出来事であるが、それを3ヵ月前と記憶する人もいれば、3年半前だと記憶する人もいたということである<sup>22</sup>。

この種の証拠は、ある申請者が20年近く経た後に、天安門広場での焼身自殺事件の正確な日付を覚えていない<sup>23</sup>とか、ある特別な人間関係が数年前の「7月初め、7月半ば、7月終わり」[どのの時期]に始まったかどうかを覚えていないという理由で、その申請者の主張が信用できないとした判断に疑問を投げかけることは明らかである<sup>24</sup>。もちろん、「慎重に繰り返して注意を払うこと」で、私たちは首都の名称や掛け算の表を暗記するのと同じように、特定の日付を記憶することができる<sup>25</sup>。例えば、「高校を卒業した年、結婚した年、子どもたちが生まれた年」などを私たちの多くは努力して覚えている<sup>26</sup>。このことを踏まえると、難民認定申請者にとってしばしば問題になる、自分や家族が逮捕された日<sup>27</sup>、集団レイプをされた日<sup>28</sup>、愛する人が殺害された日<sup>29</sup>などを思い出せないことはあり得るのだろうか。

人が記憶する日付には非常に大きな個人差があり、驚きに値するほどである。オハイオ州の歴史上3番目に大きな地震は、中規模ではあったものの、負傷者や物的損害、避難者を出すほどの地震であった<sup>30</sup>。地震発生から9ヵ月後に地元住民にその日付を尋ねたところ、回答は平均して実際と約2ヵ月のず

<sup>20</sup> 前掲注 7 Brown 1985, 139.

<sup>21</sup> 同上, 150.

<sup>22</sup> S. Bluck, L. J. Levine & T. M. Lauhere, 'Autobiographical remembering and hypermnesia: A comparison of older and younger adults' (1999) 14 *Psychology and Aging* 671-82. これに対して、被験者が過去の報道事件の日付決定に「非常に正確」であると結論づけたある研究では、被験者が過去9ヵ月以内に起こった報道事件を1ヵ月以内と推定できれば「正しい」回答としてカウントしている。W. J. Friedman & J. Huttenlocher, 'Memory for the time of "60 Minutes" stories and news events' (1997) 23 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 560-9.

<sup>23</sup> *Qian v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2007] FCJ No.1282

本稿で引用した判例は、記憶の様々な側面に関する IRB の判断を示す代表的な例である。中には、[日付の誤りに関する]争点が難民申請に対する唯一の決定要因であったものもある（後掲注 27 の Zavalat 事件、para. 63 で、裁判所は委員会の決定が「逆ピラミッド型である。結局、すべては1つの日付の不一致に遡ることができる」と述べた）。より多くの場合では、ここで強調された点は、審査会が申請を却下する際に依拠したいいくつかの要因の1つである。しかし、最終的な決定においてこれらの発見[日付の不一致]がどのような重みを持つかはともかく、本稿で提示された証拠に照らせば、難民認定決定において、これらの指摘は全く意味をなさないのである。

<sup>24</sup> *Charles v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2004] FCJ No. 2131 at para. 9.

<sup>25</sup> 前掲注 5 Friedman 1993, 54.

<sup>26</sup> 前掲注 14 Friedman 2004, 597.

<sup>27</sup> *Etemadifard v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [1995] FCJ No. 666; *Ojo v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [1997] FCJ No. 1006; *Samseen v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2006] FCJ No. 727; *Zavalat v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2009] FCJ No.1639（原文ママ。本論文の内容を含む著書では、No.1279 に修正されている）。

<sup>28</sup> *Akter v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2006] FCJ No. 1517.

<sup>29</sup> *Kadder v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2005] FCJ No. 1047; *Angandeh v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2002] FCJ No. 1345.

<sup>30</sup> M. C. Hansen, 'January 1986 Northeastern Ohio Earthquake' (Summer 1986) *Ohio Geology Newsletter* 2-5.

れがあった<sup>31</sup>。強制収容所の生存者の記憶と収容所の記録を比較した研究者によると、生存者の中には投獄された日を記憶していない者がただけでなく、[日付を]推測した回答者の何人かは6ヶ月もずれていた。研究者は、この出来事が異なる季節に起こったと[回答したことを]指摘している。「ある証人は『[私が収容されたのは]冬というよりは晩秋だったので、11月か12月だったに違いない』と断言した。実際には彼が着いたのは7月だった」<sup>32</sup>。別の研究では、殺人事件の目撃者13人に、事件の4～5ヵ月後にインタビューを行った。これらの男女は、目の前で人が射殺されるのを見ていたが、13人中10人は事件が発生した月を正しく答えることができなかった<sup>33</sup>

トラウマになるような[出来事があった]日付でさえも、私たちは確実に記憶していないという事実は、長い間「調査研究における主要な方法論上の問題」であり、調査方法論の研究者の最大の関心事であった<sup>34</sup>。例えば、過去6ヶ月間に通報されなかった犯罪の割合が増えたか減ったかを調べたい研究者は、調査対象者が説明している事件がいつ起こったかを正確に記憶しているという確信を持たなければならない。今から四半世紀前に、このような研究者たちは、私たちは深刻な暴行を受けて苦しんだとしても、その日付を正確に覚えていないことが多いことに気が付いた。人々が語った犯罪の日付と警察の記録を比較したところ、報告された日付の20%が誤りであったことが明らかになった<sup>35</sup>。ある研究では、「過去6ヶ月間に、誰かに叩かれたり、襲われたり、石や瓶などで殴られたりしたことはありますか」と質問をした。すると、そのような暴行を受けたと答えた人のうち28%が誤った日付を回答した<sup>36</sup>。研究者たちは、時間の境界を日付ではなく、記憶に残る出来事で区別することで、より正確な回答が得られることをすぐに発見した。この点を指摘した1983年の古典的な研究が「セント・ヘレンズ山の噴火以降にあなたは誰かに殴られたか (Since the eruption of Mt. St. Helens, has anyone beaten you up) ?」と題された研究である<sup>37</sup>。

研究者たちは、いつ暴行を受けたのかを思い出すためには、火山の噴火のような印象深い出来事の助けを要することを知っている。しかし、IRBのメンバーは、常に難民申請者が暴行を受けた日付<sup>38</sup>や、

---

<sup>31</sup> W. J. Friedman, 'A follow-up to "Scale effects in memory for the time of events": The earthquake study' (1987) 15 *Memory & Cognition* 518-20.

<sup>32</sup> W. A. Wagenaar & J. Groeneweg, 'The memory of concentration camp survivors' (1990) 4 *Applied Cognitive Psychology* 77-87 at 81. これは、実際のところ被験者にとって遠い記憶であるが、人生を左右するものであるため、[日付ではない]他の種類の詳細については、被験者の記憶はしばしば「驚くほど正確」であったと研究者は述べている。84.

<sup>33</sup> J. C. Yuille & J. L. Cutshall, 'A case study of eyewitness memory of a crime' (1986) 71 *Journal of Applied Psychology* 291-301; 次も参照のこと。S.-A. Christianson & B. Hübner, 'Hands up! A study of witnesses' emotional reactions and memories associated with bank robberies' (1993) 7 *Applied Cognitive Psychology* 365-79. 私たちの個人的な出来事が起きた日を特定する能力は、ポジティブな出来事よりもネガティブな出来事の方が劣るという「ポリアンナ原理 (Pollyanna principal)」と呼ばれる「ポジティブ・バイアス」の存在を示す証拠がいくつかある。前掲注8 Betz 1997, 703; 前掲注13 Wagenaar 1986.; H. L. Williams, M. A. Conway & G. Cohen, 'Autobiographical memory' in G. Cohen & M. A. Conway (eds.), *Memory in the real world* (New York: 2008), 21-90 at 41.

<sup>34</sup> 前掲注14 Thompson 1988, 461.

<sup>35</sup> J. Garofalo & M. J. Hindelang, 'An introduction to the National Crime Survey' (1977) US Department of Justice, Washington DC, in E. F. Loftus & W. Marburger, 'Since the eruption of Mt. St. Helens, has anyone beaten you up? Improving the accuracy of retrospective reports with landmark events' (1983) 11 *Memory & Cognition* 114-20 at 115.

<sup>36</sup> Loftus 1983, 同上, 116.

<sup>37</sup> 同上。

<sup>38</sup> 一例として以下を参照のこと、*Baker v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2002] FCJ No. 1200;

母親が事業を閉鎖させられた日付<sup>39</sup>、教区の教会の記念日<sup>40</sup>、兄弟姉妹の誕生日などを正確に覚えていないことを信じがたいと判断する<sup>41</sup>。ある珍しいケースでは、申請者は彼女の唯一の子どもの誕生日を答えることができなかった。彼女は子どもの年齢、おおよそ何歳か、結婚して何年目に子どもが生まれたのかを覚えていなかった。ただし、最後の出来事は回答の助けにはならなかっただろう。なぜなら、いつ結婚したかについても、彼女の回答には一貫性がなかったためである。カナダ連邦裁判所が指摘したように、「彼女が確実に覚えている日付は、自分の誕生日だけのよう」であった。このことから、IRBは「彼女の子どもの存在する事実は疑わしい」<sup>42</sup>と結論付けた。IRBは、この申請者は息子を捏造したが、息子の誕生日まで作りあげる力はなかったと結論付けたのである。時間に関する記憶の研究は、[この結論と比べて]より信頼性のある説明を提示している。田舎の出身で正規の教育をほとんど受けていないこの申請者にとって、この種の時間に関する情報はほとんど価値がなかったのかもしれない、ということである。人類の歴史のほとんどの場合において、私たちの生活は、季節の移り変わりや、移住、生殖のサイクルなど、自然に繰り返されるパターンと結びついていた。直線的な時間は、私たちの集合的意識に比較的新しく追加されたものであり、「心理的な時間を時計やカレンダーの時軸にマッピングする」というのは、「極めて最近」の現象である<sup>43</sup>。「時計やカレンダーの時間」を非常に重視される現代の文化においてさえも、日常会話に特定の日付が織り込まれると「聞き手は詳しく感じると感じるようである」<sup>44</sup>。時間に関する記憶に関する研究の第一人者であるフリードマンは、「直線的過去における出来事の絶対的な距離は、大概いつも役に立たない情報である」と結論づけている<sup>45</sup>。それが生死を分けることもある難民申請<sup>iv</sup>は、その例外状態に置かれている。

### 2.1.2 頻度 (Frequency)

「去年どのくらいの頻度で映画を観に行ったか?」「月に何回くらいレストランで食事するか?」。あなたならこれらの質問にどのように答えるだろうか?あなたの回答はどのくらい正確であろうか?

このような質問に答える際、「関連する出来事を単純に思い出し数える」ことはしないであろう<sup>46</sup>。「思い出して数える」という手順の代わりに、いくつもの変数の「複雑な相互作用」に依拠する戦略を組み合わせ、経験に基づいた推測を行うことで、人はようやく[頻度を]推定することができる<sup>47</sup>。トヴェルスキー (Tversky) とカーニマン (Kahneman) の有名な仮説である「利用可能性ヒューリスティック (availability heuristic)」と呼ばれる仮説によれば、人は繰り返し起こる出来事の頻度を推定する際

---

*Adegbola v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2007] FCJ No. 693.

<sup>39</sup> *Omrane v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2003] FCJ No. 405.

<sup>40</sup> *Kidimbu v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [1995] FCJ No. 50.

<sup>41</sup> *Udeagbala v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2003] FCJ No. 1906.

<sup>42</sup> *Kaur v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2005] FCJ No. 2112 at para. 11.

<sup>43</sup> D. B. Wright & E. F. Loftus, 'Eyewitness memory' in Cohen 2008, 前掲注 33, 91-105 at 98.

<sup>44</sup> J. R. Schulster, 'Content and temporal structure of autobiographical knowledge: Remembering twenty-five seasons at the Metropolitan Opera' (1989) 17 *Memory & Cognition* 590-606 at 605.

<sup>45</sup> 前掲注 5 Friedman 1993, 60.

<sup>46</sup> N. M. Bradburn, L. J. Rips, S. K. Shevell, 'Answering autobiographical questions: The impact of memory and inference on surveys' (1987) 236 *Science, New Series* 157-61 at 159.

<sup>47</sup> R. F. Belli, 'The structure of autobiographical memory and the event history calendar: Potential improvements in the quality of retrospective reports in surveys' (1998) 6 *Memory* 383-406 at 384; 以下を参照のこと、前掲注 17 Means 1991; D. Bruce & M. van Pelt, 'Memories of a bicycle tour' (1989) 3 *Applied Cognitive Psychology* 137-56.



に、思い浮かべやすいかどうかを根拠にしている<sup>48</sup>。それは、ある種の出来事を明確に思い出せるなら、その出来事は頻繁に起こったと推定するということである。別の研究者らは、私たちの推定は、問題となる出来事を思い出す頻度に影響され、人には「ある出来事が発生した時と、その出来事を思い浮かべた時を混同する」傾向があるという説を立てている<sup>49</sup>。

どのようにして頻度を推定するにしても、私たちは単純にそれが苦手である (simply not very good)。私たちの推定は、せいぜい「不正確であることが知られている (known to be inaccurate)」程度であり、その精度は時間の経過とともに低下していく<sup>50</sup>。この種の情報に依拠して、人びとの生活を調査する調査方法論の研究者の視点からすると、頻度を推し量る際の精度は「悲惨なほど低い (distressingly low)」<sup>51</sup>。被験者が過去1週間に銀行のATMを使った回数や小切手を切った回数、または大学でBの成績を取った回数、あるいは最近特定の種類の食料品を買った回数などを推定しようとする、一般的に50%程度の誤差がある<sup>52</sup>。かなり深刻な個人的な事柄であっても、頻度に関する記憶力は貧弱である。ある研究では、被験者が3ヶ月間にわたって自分の健康状態を日記に記し、その後、病気になった頻度を思い出そうとしたところ、正解率は65%程度だったという<sup>53</sup>。研究者らが指摘するように、これらの被験者は当時この情報を記録しており、多くが研究の最終段階でテストされるのではないかと勘づいていたため、自然な状況下ではかれらの記憶力は「さらに低下する」可能性が高いと考えられる<sup>54</sup>。

しかしながら、IRBのメンバーは、以下のようなことはあり得ないと判断している。長年にわたる「度重なる殺害予告」を受けてきた申請者が「何度脅迫されたのかを答えることが困難だった」こと<sup>55</sup>。警察官に下品な言葉で侮辱された回数を聞かれた申請者が「彼女は覚えていないと言い逃れした」こと（のちに彼女は「それは警察のいつもの言い方だ」と追加した）<sup>56</sup>。また、申請者が、出席した政党の会合の回数を宣誓下で供述できないとの理由により、「曖昧で、回避的、躊躇的 (vague, evasive and hesitant)」と判断し、申請者の「政党の会合に何回か参加したが、回数は覚えていない」という説明を退けている<sup>57</sup>。記憶に関する研究者が、調査方法論の研究者に与えた以下の警告は、難民認定の判断者にも同様に当てはまる。

調査研究者は、最も協力的な回答者の知能にさえも負荷をかけるような、ある種の定量的で自伝的な

---

<sup>48</sup> A. Tversky & D. Kahneman, 'Judgment under uncertainty: Heuristics and biases' (1974) 185 *Science, New Series* 1124-31 at 1127; 以下も参照のこと。前掲注7 Brown 1985, 142.

<sup>49</sup> 前掲注6 Cohen 1995, 274; M. Johnson & C. L. Raye, 'Reality monitoring' (1981) 88 *Psychological Review* 67-85.

<sup>50</sup> 前掲注6, Cohen 1995.

<sup>51</sup> S. Burton & E. Blair, 'Task conditions, response formulations processes, and response accuracy for behavioral frequency questions in surveys' (1991) 55 *The Public Opinion Quarterly* 50-79 at 76; 前掲注6 Cohen 1995, 274; J. B. Jobe & D. J. Mingay, 'Cognition and survey measurement: History and overview' (1991) 5 *Applied Cognitive Psychology* 175-92 at 179-80.

<sup>52</sup> Burton 1991, 同上; S. Sudman, 'On the accuracy of recording of consumer panels' (1962) 1 *Journal of Marketing Research* 69-83 in S. Sudman, A. Finn & L. Lannom, 'The use of bounded recall procedures in single interviews' (1984) 48 *Public Opinion Quarterly* 520-4 at 522.

<sup>53</sup> 前掲注6, Cohen 1995, 281.

<sup>54</sup> 同上, 284.

<sup>55</sup> *Morales v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2006] FCJ No. 609 at paras. 2, 4.

<sup>56</sup> *Joseph v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2000] FCJ No. 49 at para. 18.

<sup>57</sup> *Garande v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2006] FCJ No. 1735 at paras. 49-50.

情報をしつこく求めることが多い。記憶はあてにならない。回答者が覚えていない詳細を補うための推論は、良くても不正確であり、最悪の場合は誤解を招くものである<sup>58</sup>。

### 2.1.3 期間 (Duration)

「期間の推定に関する非常に多くの先行研究」<sup>59</sup>から導き出される主要な結論は、この種の記憶を復元することは「しばしば不正確」ということである<sup>60</sup>。

例えば、初期の研究によると、被験者は入院していた期間を長く見積もる「一貫した傾向」があること<sup>61</sup>、母親は分娩にかかった時間を実際より短く見積もる傾向がある一方で<sup>62</sup>、子どもに母乳を与えた時間は実際よりも長く見積もる傾向があること<sup>63</sup>、犯罪の目撃者の中には警察が通報に応答するまでの時間を劇的なまでに長く見積もる者がいること<sup>64</sup>などが示された。実験下で、舞台の催し物をみた被験者たちに、その上演時間を推測するよう尋ねたところ、回答は最低でも実際と2倍はずれていた<sup>65</sup>。3ヶ月間にわたって自分の健康について日記をつけてもらい、病気や不調のあった期間がどのくらいあったかを思い出してもらった実験の正確率は53%だった<sup>66</sup>。

このような間違いのパターンから、心理学者たちは、人が出来事の持続時間を想起する際には、「一般的にどれくらい続くか」、「同じような出来事が常に同じ時間続くかどうか」さらには「その期間がどれくらいの複雑さや重要性をもつ要素で満たされているか」など「その他の多くの側面」に基づいていると提唱している<sup>67</sup>。例えば、複数の研究者が「人は思い出せる出来事の数を決定的とした目安にして、経過時間を推し測っている」ことを発見している<sup>68</sup>。つまり、出来事の構成要素がバラバラであればあるほど、その出来事は長く感じられる。私たちは「特定の過去の出来事がどのくらい続いたかではなく、『典型的な』出来事の持続時間に関する知識を記憶しているようである」<sup>69</sup>ため、新しい出来

---

<sup>58</sup> 前掲注 46 Bradburn 1987, 161.

<sup>59</sup> 前掲注 5 Burt, Time 2008, 135.

<sup>60</sup> 前掲注 43 Wright 2008, 97; 以下も参照のこと、C. D. B. Burt, 'Reconstruction of the duration of autobiographical events' (1992) 20 *Memory & Cognition* 124-32; C. D. B. Burt & S. Kemp, 'Retrospective duration estimation of public events' (1991) 19 *Memory & Cognition* 252-62.

<sup>61</sup> J. W. B. Douglas & J. T. Blomfield, 'The reliability of longitudinal surveys' (1956) 34 *The Milbank Memorial Fund Quarterly* 227-52 at 245; 以下も参照のこと、Burt 1991, 同上, 253.

<sup>62</sup> M. K. Pyles, H. R. Stolz & J. W. Macfarlane, 'The accuracy of mothers' reports on birth and developmental data' (1935) 6 *Child Development* 165-76 in Burt 1991, 同上。

<sup>63</sup> S. A. Mednick & J. B. P. Shaffer, 'Mothers' retrospective reports in child-rearing research' (1963) 33 *American Journal of Orthopsychiatry* 457-61 in Burt 1991, 同上。

<sup>64</sup> A. L. Schneider, W. R. Griffith, D. H. Sumi & J. M. Burcart, 'Portland forward records check of crime victims' (1978) US Department of Justice, Washington DC, in E. F. Loftus, J. W. Schooler, S. M. Boone & D. Kline, 'Time went by so slowly: Overestimation of event duration by males and females' (1987) 1 *Applied Cognitive Psychology* 3-13 at 12 (Loftus, Time).

<sup>65</sup> C. D. B. Burt & J. Popple, 'Effects of Implied Action Speed on Estimation of Event Duration' (1996) 10 *Applied Cognitive Psychology* 53-63.

<sup>66</sup> 前掲注 6 Cohen 1995, 282.

<sup>67</sup> A. C. I. Pedersen & D. B. Wright, 'Do differences in event descriptions cause differences in duration estimates?' (2002) 16 *Applied Cognitive Psychology* 769-83 at 773; V. Prohaska, 'Reporting the dates of events: The role of prior knowledge' (1996) 4 *Memory* 325-36; 前掲注 64 Loftus, Time 1987, 3.

<sup>68</sup> 前掲注 43 Wright 2008, 98.

<sup>69</sup> 前掲注 5 Burt, Time 2008, 137 (強調は筆者)。

事や一風変わった (novel) 出来事の持続時間を推定することは特に困難であり、また推定は驚くほど暗示にかかりやすい。質問の仕方によって、回答が大きく変わり得るのである<sup>70</sup>。ある論文の結論にあるように、「概して、出来事の所要時間を推定することは、非常に難しい」<sup>71</sup>。

難民認定の判断者は、申請者が出来事の持続時間を覚えていると想定することはできないし、また期間を正確に回答できると想定することには注意を払うべきである。例えば、カナダ連邦裁判所が、銃口を向けられた状態で自分の墓穴を掘るのにかかった時間を覚えていないことを理由に、申請者[の供述]には信憑性がないと判断した IRB の決定を覆したことは確かに正しかった。同裁判所は、「申請者は時計を持っていなかったが、それよりも更に重要なのは、彼が置かれていた特殊な状況下で、彼の思考はその点[持続時間]に注目していなかったと説明したこと」に IRB のメンバーはもっと注意を払うべきであったと指摘した<sup>72</sup>。

#### 2.1.4 順序 (Sequence)

日付の記憶に関するいくつかの初期の研究では、記憶は明らかに頼りないものの、出来事の「相対的な順序についてはかなり正しい考え」を持っているらしいことが指摘されていた<sup>73</sup>。しかし、この問題に特化したより新しい多くの研究は、この結論に疑問を投げかけている。例えば、ある調査では参加者の日記をカードに書き写してシャッフルしたうえで、被験者にカードを時系列に並べ直すように指示したところ、個々の出来事をどれだけよく覚えているかにかかわらず、正しい順序で並べることができたのは平均 36.5%であった<sup>74</sup>。別の実験では、被験者はカメラを与えられ、一日の出来事を記録するように指示された。一日の終わりに、写真を時系列に並べるように指示されたが、正しく並べることができた被験者は半分より少し多い程度 (52.6%) であった。2ヵ月後には、その正解率は 36.2%にまで低下した<sup>75</sup>。

このような研究から、研究者らは現在では、次のような結論を導いている。人は「自伝的な出来事の構成要素の順序を思い出すことにしばしば困難を覚え」<sup>76</sup>、このような作業が「あまり得意ではなく」<sup>77</sup>、私たちの試みは「時系列的な誤配置 (chronological misplacements) と特徴づけられ」<sup>78</sup>、さらにこの種の記憶が「急速に薄れる」という「十分な証拠」がある<sup>79</sup>。研究者らが指摘する通り、これらの[順序の記憶の]誤りのパターンは、「出来事の日付を言い当てる能力の調査で判明した誤りの発生率と一致し

---

<sup>70</sup> 例えば、大学の講義で演出された事件を目撃した後、学生に「その人が階段講堂を〇〇のにかかった時間はどれくらいですか? 「歩く」「走る」「通る」のいずれかを当てはめて質問を完成しなさい」と質問され、学生たちの推測は、選択する動詞が意味する速度と対応しており、「歩く」では最も長い時間、「走る」では最も短い時間として推測した」:前掲注 65 Burt 1996, 56; 以下も参照のこと、前掲注 67 Prohaksa 1996; 前掲注 60 Burt 1992。

<sup>71</sup> 前掲注 43 Wright 2008, 99.

<sup>72</sup> *Alfonso v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2007] FCJ No. 72 at para. 38.

<sup>73</sup> 前掲注 7 Brown 1985, 150; 以下も参照のこと。前掲注 47 Bruce 1989, 153.

<sup>74</sup> C. D. B. Burt, S. Kemp, J. M. Grady & M. Conway, 'Ordering autobiographical experiences' (2000) 8 *Memory* 323-32.

<sup>75</sup> C. D. B. Burt, S. Kemp & M. Conway, 'Ordering components of autobiographical events' (2008) 127 *Acta Psychologica* 36-45 (Burt, Ordering). また、別の研究によれば、私たちの出来事を順序付ける能力は、それらの出来事が互いに無関係である場合にはさらに低下する可能性が高い; 前掲注 14 Friedman 2004, 595, 597.

<sup>76</sup> Burt, Ordering 2008, 同上, 43.

<sup>77</sup> 前掲注 5 Burt, Time 2008, 130.

<sup>78</sup> 前掲注 74 Burt 2000, 330.

<sup>79</sup> 前掲注 75 Burt, Ordering 2008, 43.

ている」<sup>80</sup>のであり、「『何があったかの記憶』は『いつあったかの記憶』とはほとんど無関係であるようだ」という数々の研究によって得られた一般的な調査結果を裏付ける証拠であるというほかない<sup>81</sup>。

## 2.2 日常的な物 (Common objects)

ソマリア市民であるという難民申請者の主張を検証するために、裁判所事務官 (Tribunal Officer) は彼女に以下のような簡単な質問をした。「ソマリアの5シリング紙幣の裏には何が描かれていますか」。彼女の弁護士が介入し、「私の依頼人が答える前に」と言い、こう続けた。「では、事務官。カナダの5ドル札の裏には何が描かれているかお答えください」。事務官は答えることができなかった。

私たちは日常的な物の見た目について、予想外に貧弱な記憶力しか持っていない。そのため、事務官の質問は見かけよりも単純ではない。1979年に実施された日常的な物の見た目の記憶に関する代表的な研究は、アメリカ人の被験者たちがアメリカの1セント銅貨について非常に大まかな考えしかもっていないことを示した。この研究では、何もないところから1セント銅貨を描くこと、特徴の書かれたリストをもとに1セント銅貨を描くこと、正しい特徴と偽の特徴のリストの中から選択すること、1セント銅貨の写真の中から不正確なものを識別すること、並べられた1セント銅貨から本物を選ぶこと、をアメリカ人被験者に要求した。その結果を研究者たちは控えめに「驚くべきほどに貧弱 (Remarkably poor)」と表現した<sup>82</sup>。1セント銅貨を描く試みのほとんどは、「非常に不正確」であった。被験者の半分以下しか本物の1セント銅貨を見分けることができず、多くの被験者が多数の偽の特徴に騙された<sup>83</sup>。これらの結果が1セント銅貨に特有のものであった場合に備えて、異なる硬貨を用いた実験も行われたが、同様の結果となった<sup>84</sup>。さらに、これらの結果がアメリカ人特有のものである場合のために、カナダ人、ポルトガル人、アイルランド人、日本人、イギリス人などを対象として同様の実験が行われたが、誰一人として硬貨がどのような見た目であるかをはっきりとわかっていなかった<sup>85</sup>。

その他の研究が示してきたように、日常的な物の見た目となると、計算機のキーボードの数字の並び<sup>86</sup>から三日月の形<sup>87</sup>にいたるまで全ての物について記憶することが困難なのである。テキストメッセージ [が普及する] 前の時代に行われたある研究によれば、151人の参加者のうち電話のダイヤル上に文字がどのように配置されているかを正確に覚えている者は一人もいなかった<sup>88</sup>。異なる一連の研究において、被験者は「最も重要かつ一般的な」イギリスの道路標識の主要な特徴、例えば形状や色などのうち平均

---

<sup>80</sup> 同上。

<sup>81</sup> J. J. Skowronski, W. R. Walker & A. L. Betz, 'Ordering our world: An examination of time in autobiographical memory' (2003) 11 *Memory* 247-60 at 257; 以下を参照のこと、前掲注5 Friedman, 1993.

<sup>82</sup> R. S. Nickerson & M. J. Adams, 'Long-term memory for a common object' (1979) 11 *Cognitive Psychology* 287-307 at 288.

<sup>83</sup> 同上, 301 (ただし、誰も「台湾製」には騙されなかった)。

<sup>84</sup> D. C. Rubin & T. C. Kontis, 'A schema for common cents' (1983) 11 *Memory & Cognition* 335-41.

<sup>85</sup> B. M. Hughes, 'Misremembering the appearance of common objects: Further cross-cultural confirmation' (2002) 95 *Perceptual and Motor Skills*, 1255-8 at 1255; G. V. Jones, 'Misremembering a common object: When left is not right' (1990) 18 *Memory & Cognition* 174-82.

<sup>86</sup> M. Rinck, 'Memory for everyday objects: Where are the digits on numerical keypads?' (1999) 13 *Applied Cognitive Psychology* 329-50.

<sup>87</sup> M. Martin & G. V. Jones, 'Memory for orientation in the natural environment' (1997) 11 *Applied Cognitive Psychology* 279-88.

<sup>88</sup> J. Morton, 'A singular lack of incidental learning' (1967) 215 *Nature* 203-4. 前掲注 86 Rinck 1999.

してたったの 47%しか覚えていなかった。研究者たちが指摘したように、硬貨と比べると道路標識は「ずっと大きく、そのデザインは単に異なる形状であるだけでなく異なる色が用いられており、それらに注意することは個人の安全にとって極めて重要である<sup>89)</sup>」にもかかわらず、である。参加者のほぼ半数は八角形の「止まれ」のサインが円形であると信じていた<sup>90)</sup>。このような日常的な物の場合、「繰り返し目にすることは…それらの概観を正確に思い起こすためには、驚くほど役に立たないのである<sup>91)</sup>」。

これらの研究から、日常的な物の見た目に関する視覚的記憶は特に貧弱であり、これは[記憶の]検索の失敗というより、むしろコード化のためであるという意見の一致が得られた。つまり、私たちはこれら情報を記憶のどこかに蓄えており、それを見つけ出すのが難しいのではなく、むしろこの種の情報を覚えておくこと自体に失敗しているのである。「受動的に目にする…それ自体が記憶の保持に結びつくわけではない<sup>92)</sup>」からである。当然ながら、「日常的な物の記憶：短期的かつ意図的な学習により、アメリカ硬貨の特徴の想起不良は克服可能 (Memory for common objects: Brief intentional study is sufficient to overcome poor recall of US coin features)」と題する研究が示す通り、硬貨がどのような見た目であるかを努力して学ぶことはできる<sup>93)</sup>。しかし、私たちがそのようなことをまずしないのは、そうした知識が「役立つ機能を持たないであろう」からだ<sup>94)</sup>。すなわち、「硬貨を適切に使うためにそこに何が彫られているかを知っておく必要はない<sup>95)</sup>」。私たちの日常的な物の見た目の記憶は「必要である限りにおいて詳細かつ正確」であり、「日常生活において要求されるかなり大まかな識別を行うために十分な視覚的特性のみを記憶する<sup>96)</sup>」のである。

しかしながら、難民申請のヒアリング<sup>97)</sup>において、もし難民申請者がこの種の記憶テストにうまく答えられなければ、信用されないかもしれない。だが、例えば、自身の国の身分証明書 (national identity document) について正確に説明できない難民認定の申請者<sup>97)</sup>は、単にこのよく知られた記憶の現象を示しているだけである場合があるのだ。

### 2.3 繰り返される出来事 (Repeated events)

似たような出来事を繰り返し経験すると、後になってそれがどのくらいの頻度で起きたかを判断するのが困難になるだけでなく、蓄積された研究が結論として示すように、一般的に私たちは個々の出来事を明確に思い出す能力すらも失ってしまう。このように「最初のうちは区別できる出来事であっても、混乱したり思い出せなくなったりしうる<sup>98)</sup>」のは、端的に言って「ある特定の繰り返される出来事を覚

---

<sup>89)</sup> M. Martin & G. V. Jones, 'Generalizing everyday memory: Signs and handedness' (1998) 26 *Memory & Cognition* 193-200 at 193-4.

<sup>90)</sup> 同上, 198.

<sup>91)</sup> 同上, 195.

<sup>92)</sup> 前掲注 87 Martin 1997, 280.

<sup>93)</sup> W. R. Marmie & A. F. Healy, 'Memory for common objects: Brief intentional study is sufficient to overcome poor recall of US coin features' (2004) 18 *Applied Cognitive Psychology* 445-53.

<sup>94)</sup> 前掲注 87 Martin 1997, 280. 以下も参照のこと, 同上 Marmie 2004, 446.

<sup>95)</sup> 前掲注 84 Rubin 1983, 340.

<sup>96)</sup> A. D. Smith & G. Cohen, 'Memory for places: Routes, maps, and object locations' 前掲注 33 Cohen 2008, 173-206 at 193 に収録。

<sup>97)</sup> *Kabashi v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [1998] FCJ No. 509; *Ali v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2004] FCJ No. 1350.

<sup>98)</sup> 前掲注 46 Bradburn 1987, 158.

えておくこと」がしばしば困難であるためである<sup>99</sup>。

このことは、研究者たちが「更新の問題（‘the “updating” problem’）」として言及するものの結果の一部である。今日どこに駐車したかを覚えておくためには、昨日どこに駐車したかという記憶を更新する必要がある。結果として「二週間前にどこに駐車したかを尋ねられた場合、どれだけ正確に回答しても誤りである可能性が高い。更新することによって、過去の出来事に固有の細部は、記憶から効果的に消去されてしまう<sup>100</sup>」。さらに、私たちは苦しんだ風邪のひとつひとつや、毎回病院に行った時のことを覚えるよりもむしろ、このような類似の出来事についての記憶は概して混ざりあい、一般的な風邪や病院へ行ったことなど「似たような種類の出来事に関する一般的な記憶<sup>101</sup>」に置き換えられる<sup>102</sup>。一度私たちの思考がこの新しい「混合した記憶（blended memory）」を創り出すのに十分な情報を得ると<sup>103</sup>、過去の出来事の具体的な詳細はもはや必要でなくなる。かわりに私たちが保持するのは出来事の要点である。「もし全ての事が記憶されていたならば起こりえる膨大な問題<sup>104</sup>」を考慮すると、特定の出来事の記憶から汎用的な筋書きの記憶（generic script memory）への変化は、[記憶を]呼び起こす効率性を最大化する良い方法のようである<sup>105</sup>。

このかなり直感的な見解を支持する日常的な例は多々ある<sup>106</sup>。しかしながら、難民認定の判断者は、もし繰り返される出来事が十分に重要であったり、気持ちをかき乱したりするようなものならば、それぞれの出来事が私たちの脳裏に焼き付いて、この種の[記憶の]変化とは無縁であるはずだと信じていることが多いようである。重大かつ苦痛を与えるような事件であっても、他の日常的な出来事と同様に、汎用的な記憶の筋書きへの移行が行われているということ、判断者はしばしば理解できていない。

もし繰り返される重要な出来事がこの種の変化と無縁であるならば、私たちは自分の病歴を思い出せ

---

<sup>99</sup> 前掲注 2 Haber 2000, 1070.

<sup>100</sup> 同上 1071.

<sup>101</sup> J. B. Jobe, R. Tourangeau & A. F. Smith, ‘Contributions of survey research to the understanding of memory’ (1993) 7 *Applied Cognitive Psychology* 567-84 at 576.

<sup>102</sup> 前掲注 33 Williams 2008, 28; 前掲注 47 Belli 1998, 388.

<sup>103</sup> 前掲注 33 Williams 2008, 23.

<sup>104</sup> S. Kemp, C. D. B. Burt & L. Furneaux, ‘A test of the peak-end rule with extended autobiographical events’ (2008) 36 *Memory & Cognition* 132-8 at 133.

<sup>105</sup> アルリック・ナイサー (Ulric Neisser) は、自伝的記憶における草分け的研究者で、繰り返される出来事に対して作成されるこれらの記憶を意味する「再エピソード記憶 (repisodic memory)」という用語を造り出した。有名な事例研究では、ナイサーは、リチャード・ニクソン (Richard Nixon) の元法律顧問であるジョン・ディーン (John Dean) の証言を分析した。彼は上院ウォーターゲート特別委員会 (the Senate Watergate Investigating Committee) に出席し、「後にテープに記録されていたことが判明する会話について証言した」。ディーンの個々の会話の記述は「系統的な歪曲」を含んでいたが、それにも関わらず、ナイサーはそれを「(表向きは特定のエピソードを説明していたため)「意味論的」観点でも (エピソードに関する説明がしばしば間違っていたため)「エピソード的」観点でもないレベルで基本的には正確であった」と結論づけた。「再エピソード的 (repisodic)」という用語はまさにこのような記憶を記述するものとしての造語である。すなわち、記憶されたエピソードのように思えるものが実際は繰り返される重大な出来事を表すものであり、したがって、本当に存在する状態を反映しているのである」。ナイサーが結論として記すように、ディーンは「一連の会話全体のテーマを覚えていて、異なる出来事のなかでそれを表現した」。U. Neisser, ‘John Dean’s memory: A case study’ (1981) 9 *Cognition* 1-22 at 1. 以下も参照のこと。前掲注 14 Barclay 1986, 102. 一方、ナイサーのジョン・ディーンに関する研究の方法論的批判については以下を参照のこと、D. Edwards & J. Potter, ‘The Chancellor’s memory: Rhetoric and truth in discursive remembering’ (1992) 6 *Applied Cognitive Psychology* 187-215.

<sup>106</sup> 以下を参照のこと、前掲注 101 Jobe 1993.

るかもしれない。実際にはうまく思い出せないことがよく知られており、それは上述した反復効果 (repetition effects) のためでもある。ある研究では、被験者に1年前に繰り返し起こった深刻な医療上の出来事を思い出すよう求めた。この研究における「繰り返される」出来事の定義は、3回以上の医療の専門家による診察を要したものであり、「深刻な」の定義は「もし医療の専門家による治療がなされなければ、高確率で重感染症、衰弱、死に至るような問題を伴う」ものである<sup>107</sup>。被験者はそのような診療の半分以上(54%)を思い出すことに失敗した<sup>108</sup>。同様に、もし苦痛を与える記憶がこの種の変化の影響を受けないのであれば、ソーシャル・ワーカーや調査方法の研究者は、家庭内虐待の被害者が特定の出来事をより思い出せるための新しい方法を開発する試みをやめるかもしれない。研究者たちは長い間、被験者が特定の虐待の事例を思い出せないことにより、かれらによる人生経験の説明の「妥当性を損なわれる可能性がある」と認識してきた。そのために、研究者たちは、被害者の女性たちがこうした種類の記憶に「より容易にアクセス」できる手助けをしようと様々な調査方法を探求してきた<sup>109</sup>。そして、以下でさらに論じるように、最近のある難民研究によれば、難民申請者によって報告された「ある共通の困難」は「似たような出来事を繰り返し経験したことに関連して」おり、これまで報告されてきた記憶に関する諸問題は「二つ以上の出来事の混合」によって引き起こされてきたのかもしれないことが指摘されている<sup>110</sup>。

苦痛を感じさせる出来事の繰り返しが、特定の出来事の記憶から一般的な筋書きの記憶へと変化することを最も明瞭に示す例の一つは、売春とポルノの組織から数か月にわたって性的に搾取されていた四人の若者の研究によって示されている。最終的に虐待者が逮捕された時に、(8歳から15歳の)これらの子どもたちが警察によって詳細な事情聴取を受けた。子どもたちは、自身が経験した虐待の詳細について包括的な供述を行い、警察の入手した数百の録音テープと写真によって、その供述の真実性と正確性が裏付けられた。それにもかかわらず、子どもたちは、法医学的な証拠もある特定の出来事の詳細を尋ねられた際、明確な記憶を持っていないことも多かった。このような多数の出来事について、子どもたちはそれらを思い出せないと認めるか、[子どもたちの供述と]正反対の決定的な証拠があるにもかかわらず、一度も起こらなかったと主張した。総合的にみると、子どもたちの証言は「高レベルの省略エラー (omission errors)」を含んでいた。かれらは「起こったことがわかっている」深刻な虐待行動の三分の一以上(39%)について記憶が全くなかった<sup>111</sup>。研究者たちはこれらの繰り返される出来事についての子どもの記憶は、単に溶け合ったのだと結論付けた<sup>112</sup>。

端的に言えば、重要な、あるいは苦痛を感じさせる出来事に関する難民申請者の記憶について、標準的

---

<sup>107</sup> 前掲注 17 Means 1991, 307.

<sup>108</sup> 同上, 以下も参照のこと, 前掲注 6 Cohen 1995; J. B. Jobe, A. W. White, C. L. Kelley, D. J. Mingay, M. J. Sanchez & E. F. Loftus, 'Recall strategies and memory for health-care visits' (1990) 68 *Milbank Quarterly* 171-89.

<sup>109</sup> M. Yoshihama, B. Gillespie, A. C. Hammock, R. F. Belli & R. M. Tolman, 'Does the life history calendar method facilitate the recall of intimate partner violence? Comparison of two methods of data collection' (2005) 29 *Social Work Research* 151-63. 以下もまた参照のこと, R. F. Belli, W. L. Shay & F. P. Stafford, 'Event history calendars and question list surveys: A direct comparison of interviewing methods' (2001) 65 *Public Opinion Quarterly* 45-74 at 66.

<sup>110</sup> Herlihy, P. Scragg & S. Turner, 'Discrepancies in autobiographical memories – implications for the assessment of asylum seekers: repeated interviews study' (2002) 324 *British Medical Journal* 324-7 at 326. 以下も参照のこと, 前掲注 3 Herlihy 2009, 183.

<sup>111</sup> S. Bidrose & G. S. Goodman, 'Testimony and evidence: A scientific case study of memory for child sexual abuse' (2000) 14 *Applied Cognitive Psychology* 197-213 at 209.

<sup>112</sup> 同上。

な「エピソード記憶から意味記憶への移行 (transition from episodic to semantic memory) <sup>113</sup>」が発生した形跡を目にすることは十分にありえることである。

## 2.4 周辺的な情報 (Peripheral information)

ある出来事が記憶に残るという事実は、私たちがその細部の全てを覚えているということを意味しない。例えば、申請者は、数年前のある時に「軍事検察庁 (the military prosecutor's office) の人々がどのような服を着ていたか」<sup>114</sup>、所持品を入れて持っていたバッグの正確な形状、サイズ、色<sup>115</sup>、あるいは申請者が当局に捜索されていることを知った時に聴いていたラジオ局の周波数<sup>116</sup>などを記憶しているはずだと IRB が考えたとしても、それは人々がどのように記憶するかに関する私たちの知見と一致しない。

広範な研究が明らかにしているように、「感情的なシナリオの中で起こったからと言って、細部の全てが十分に記憶されていると仮定することは正当化されない」<sup>117</sup>。むしろ、私たちはその時に最も注意を払っていた出来事のある側面を最もよく覚えており、その焦点からはずれた部分を明確に覚えている可能性は低い。例えば、「あなたの眼前である出来事が起こり」、「あなたがよく見たり聞いたりできる範囲であったとしても、もしその時点であなたが他のことに注意を向けていたら、その出来事があなたの記憶に影響を与えることはない」<sup>118</sup>。

ある出来事の特定の側面に焦点を当てるという行為自体が「代償を伴う」との報告に対して、驚きを感じるべきだろうか。[特定の側面に焦点をあてた代償として]同程度に細心の注意を払っていなかった他の情報について、記憶する能力が損なわれているだけである<sup>119</sup>。研究者は「注意の狭まり (attentional narrowing)」<sup>120</sup>、あるいは「トンネルメモリー (訳注：視野狭窄的な記憶と呼ばれる現象)」<sup>121</sup>が、[犯罪行為の]目撃者についての多くの研究の結果を説明するのに役立つだろうと指摘している。その研究は、現実の、あるいは疑似的に行われた犯罪について証言する目撃者が、目の前で繰り広げられる出来事の中心的な特徴に意識的に焦点を当てると、その他の周辺的な状況の詳細については著しく記憶を損なったというものである<sup>122</sup>。これらの研究は、「似たようなパターンのデータに収斂する傾向がある」。目撃者の説明は、感情的または暴力的な出来事の中心的で重要な部分に関しては時間

---

<sup>113</sup> 前掲注 17 Means 1991, 298.

<sup>114</sup> *J.U. v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [2005] FCJ No. 1079 at para. 8.

<sup>115</sup> *Hagi-Mayow v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [1994] FCJ No. 292 at para. 15.

<sup>116</sup> *Michael v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [1997] FCJ No. 933.

<sup>117</sup> 前掲注 33 Christianson 1993, 367.

<sup>118</sup> 前掲注 2 Haber 2000, 1061.

<sup>119</sup> S.-A. Christianson & E. F. Loftus, 'Memory for traumatic events' (1987) 1 *Applied Cognitive Psychology* 225-39 at 237; M. A. Safer, S.-A. Christianson, M. W. Autry & K. Österlund, 'Tunnel memory for traumatic events' (1998) 12 *Applied Cognitive Psychology* 99-117; J. M. Brown, 'Eyewitness memory for arousing events: Putting things into context' (2003) 17 *Applied Cognitive Psychology* 93-106; S.-A. Christianson, E. F. Loftus, H. Hoffman & G. R. Loftus, 'Eye fixations and memory for emotional events' (1991) 17 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition* 693-701.

<sup>120</sup> 同上 Christianson 1991, 693.

<sup>121</sup> Safer 1998, above n. 119; T. H. Kramer, R. Buckhout & P. Eugenio, 'Weapon focus, arousal and eyewitness memory: Attention must be paid' (1990) 14 *Law & Human Behavior* 167-84 at 168.

<sup>122</sup> 例として次を参照のこと, 前掲注 33 Christianson 1993 ; 前掲注 119 Christianson 1987.



が経過しても正確であり、[記憶が]持続的であるように見えるが、周縁的で重要でない詳細、または周縁的、付随的な情報については正確性が低くなる<sup>123</sup>。

どの情報が「中心的」で、どの情報が「周縁的」であるかは、必然的に主観的な判断であり、その記憶が問題になっている人[目撃者]の視点から決定されるものである<sup>124</sup>。「中心的な細部」とは、「主体が最も重要であると考える」ものである<sup>125</sup>。目撃者の記憶に関する研究から明らかになる驚くべき事実の一つは、私たちの注意を引く情報の種類にはかなりの個人差があるということである。違う人々が同じ犯罪現場を見た時、ある人は車の車種を覚えているが色は覚えておらず、またある人は、色は覚えているが車種は覚えていなかった<sup>126</sup>。ある発砲事件の目撃者は警察に、犠牲者の死体から目を離せなかったと語った。彼女は[被害者の]彼の傷、路上での位置や体勢を精密にかつ正確に説明することができた。しかし、彼が何を着ていたのか説明するように言われた時、彼女は、彼は T シャツと赤と黒の格子縞のジャケットを着ていたと記憶していた。しかし、彼が着ていたのは紺色のセーターとブルーのデニムジャケットであった。文字通り、彼女の注意の焦点であった体を包んでいたにもかかわらず、犠牲者の服は[目撃者にとって]周縁的な情報であった（「この目撃者は、死体が彼女の「主な注意の焦点」であると報告したが、そこに衣服は含まれていないようである」<sup>127</sup>）。

通常、私たちの注意を引くものは何と言っても武器であり、このことは私たちの周辺記憶に予測可能な影響を及ぼす。多くの研究では、武器に遭遇した被験者たちは、武器を持っている人物も含め、武器の周辺にある他の全てのものを犠牲にして、武器に焦点を当てる。この「武器の効果」または「武器への焦点化」の証拠について記録した最初の研究は、コンビニエンスストアの業務について短いビデオを2つのグループに見せたものである。片方のビデオでは、客が店員に小切手を渡し、店員が彼にお釣りを返す。ところがもう一方のビデオでは、客は銃を取り出し、店員は引き出しから彼にお金を渡す。それ以外は同じ内容である。銃のバージョンを見た被験者で、容疑者の候補のなかからその客を選ぶことができたのは半分以下だった<sup>128</sup>。この効果は、他の多くの実験室での研究や、ライフシミュレーション実験（訳注：現実を再現した模擬実験）でも再現されている<sup>129</sup>。

---

<sup>123</sup> Christianson 1993, above n. 33, 376; but see, B. S. Cooper, M. A. Kennedy, H. F. Hervé, J. C. Yuille, 'Weapon focus in sexual assault memories of prostitutes' (2002) 25 *International Journal of Law and Psychiatry* 181-91.

<sup>124</sup> 前掲注 110 Herlihy 2002, 110, 325.

<sup>125</sup> 前掲注 121 Kramer 1990, 168.

<sup>126</sup> A. B. Villegas, M. J. Sharps & S. Chisholm, 'Eyewitness memory for vehicles' (Fall 2005) *The Forensic Examiner* 24-8 at 28.

<sup>127</sup> 前掲注 33 Yuille 1986, 296.

<sup>128</sup> E. F. Loftus, G. R. Loftus & J. Messo, 'Some facts about "Weapon Focus"' (1987) 11 *Law & Human Behavior* 55-62 (Loftus, Weapon).

<sup>129</sup> A. Maass & G. Köhnken, 'Eyewitness identification: Simulating the "weapon effect"' (1989) 13 *Law & Human Behavior* 397-408; Kramer 1990, above n. 121; W. Oue, N. Onuma, Y. Uchino & Y. Hakoda, 'The effect of sharpness of a knife on weapon focus' (2002) 21 *Japanese Journal of Psychonomic Science* 45-6; 次を参照のこと。前掲注 2 Haber 2000.しかし、武器に注意を向けたからといって、必ずしもその武器を鮮明に覚えているとは限らない。注意を集中させることは、詳細な記憶のための必要条件ではあるが、十分条件ではない。「武器の焦点化」の研究では、被験者は概して武器をうまく説明できたという報告もあるが（前掲注 121 Kramer 1990）、他の多くの研究では、武器に焦点を当てた実験環境下でも、私たちは異なる種類の銃を認識・識別することが非常に苦手であることがわかっている。（次を参照のこと、M. J. Sharps, A. B. Hess, H. Casner, B. Ranes & J. Jones, 'Eyewitness memory in context: Toward a systematic understanding of eyewitness evidence' (Fall 2007) *The Forensic Examiner* 20-7 at 22).別の研究で、103 人の回答者のうち 92 人が、実際には電動ドライバーを持っていた男の手に握られている銃を見

武器への焦点化は前方にも後方にも作用しうる。私たちは一度武器が目に入ると、その場面の他の側面について覚えておくことを停止するだけでなく、武器が現れる前に出現した情報を思い出すことにも苦勞するかもしれない。このような「逆行性損傷 (retrograde impairments)」<sup>130</sup>は、前述のビデオを用いた研究の修正版で実証された。2つのグループの被験者が一方のビデオは事件が起こらずに終了し、もう一方のグループは発砲[の場面]で終了する点を除き、同一のビデオを視聴した。暴力的なバージョンを見たグループは、発砲が起こる以前にあったビデオの前半についての周辺的な詳細を思い出すことに苦勞した。記憶の違いは「劇的」であった。暴力的なバージョンを見た被験者のわずか4.3%しかビデオの前半に出てくる特定の詳細を思い出せなかったのに対して、非暴力的なバージョンのグループでは27.9%であった。「これらの記憶障害についての有力な説明は、精神的ショックは、情報を記憶に完全に保存するために必要な時間のかかる処理を中断させるということである<sup>131</sup>。」と、研究者たちは結論づけた。

複数の心理学者は、武器が存在する時、「起こっている他のほとんどすべてが見過ごされ、したがって記憶されず」、また「いかなる形の暴力も注意を狭めると常に想定されるべきであり、結果として生じる狭められた注意の外側にあるものは、仮に可能だとしても、完全には記憶されない<sup>132</sup>」と指摘している。しかしながら、この指摘は少々言い過ぎかもしれない。なぜなら、この効果（武器への焦点化）を発見できない他の研究も存在しており<sup>133</sup>、この効果がすべての環境下で起きるわけではないこと、若しくは起きたとしても他の効果の方が重要であることを示唆しているためである。とはいえ、武器への焦点化は、一般的に周辺の詳細<sup>134</sup>についての目撃者の記憶を損ない、「【出来事が起こった時の】高度

---

た、と思ったという事実は、別の関連する問題を浮き彫りにしている。目撃者の記憶に関する「印象的な心理学的研究の数々」、「2000 以上の論文 (2005 年時点) からなる心理学的研究」は、「重大な不正確さは珍しくなく、記憶は非常に暗示にかかりやすい」ことを疑問の余地なく証明している。P.A. Granhag, L. A. Strömwall & M. Hartwig, 'Eyewitness testimony: Tracing the beliefs of Swedish legal professionals' (2005) 23 *Behavioral Sciences and the Law* 709-27 (Granhag, Eyewitness) at 709; Sharps 2007, above, 25; Williams 2008, above n. 33, 76; see also, D. B. Wright & E. F. Loftus, 'How misinformation alters memories' (1998) 71 *Journal of Experimental Child Psychology* 155-64.

<sup>130</sup> B. H. Bornstein, L. M. Liebel & N. C. Scarberry, 'Repeated testing in eyewitness memory: A means to improve recall of a negative emotional event' (1998) 12 *Applied Cognitive Psychology* 119-31; E. F. Loftus & T. E. Burns, 'Mental shock can produce retrograde amnesia' (1982) 10 *Memory & Cognition* 318-23.

<sup>131</sup> 前掲注 130 Loftus 1982, 321 しかし、これらの結果は終始一貫して再現されているわけではない。衝撃的な画像をそうでない画像の中に挿入して被験者に見せた他の研究では、逆行性障害ではなく、逆行性が見られた。以下を参照のこと、T. H. Kramer, R. Buckhout, P. Fox, E. Widman & B. Tusche, 'Effects of stress on recall' (1991) 5 *Applied Cognitive Psychology* 483-88; S.-A. Christianson & L.-G. Nilsson, 'Functional amnesia as induced by a psychological trauma' (1984) 12 *Memory & Cognition* 142-5.

<sup>132</sup> 前掲注 2 Haber 2000, 1062.

<sup>133</sup> 研究者が現実の犯罪のケースレポートを分析する際、例えば、暴行事件の被害者にインタビューしたりすると、凶器が使用された場合の方が、加害者に関する目撃者の証言はより完全なものになることがある。しかし、この種の研究はサンプルサイズが小さく、多くの主要な「交絡変数」(confounding variables) をコントロールすることができないため、一般化することは困難である。例えば、目撃者がどのくらいの距離にいたのか、どのくらいの視界が確保されていたのか、どのくらいの時間犯行が続いたのか、目撃者が事前に犯人を知っていたのかどうかなどを、研究者はケースレポートから知ることができないのである。前掲注 123 Cooper 2002, 189; G. F. Wagstaff, J. MacVeigh, R. Boston, L. Scott, J. Brunas-Wagstaff & J. Cole, 'Can laboratory findings on eyewitness testimony be generalized to the real world? An archival analysis of the influence of violence, weapon presence, and age on eyewitness accuracy' (2003) 137 *The Journal of Psychology* 17-28 at 25, 26.

<sup>134</sup> 前掲注 126 Villegas 2005, 24; 同様に次も参照のこと、前掲注 129 Granhag, Eyewitness, 2005, 718.

なストレスは思い出せる記憶の量を減らす傾向がある<sup>135</sup>」という「幅広いコンセンサス」は引き続きあると言える。

前述に照らして、判断者は、出来事の特定の側面、特に暴力的な側面は、その性質上非常に重要であるため、申請者がそれを忘れることはほとんどないと結論付けることに、極めて慎重でなければならない。

## 2.5 名前

多くの研究は、私たちのほとんどが本能的に知っていること、すなわち、固有名詞は覚えにくいことを実験によって示している。臨床の現場では、それが明らかになる。例えば、被験者が人の名前を覚えることは、その人の職業や趣味を覚えることよりもはるかに難しい<sup>136</sup>。実際に、「名前を記憶することと職業を記憶することには大きな差がある<sup>137</sup>」。多くの研究者は、記憶の欠落は「他の種類の単語よりも固有名詞の方がはるかに頻繁であり<sup>138</sup>」、私たちの脳は、固有名詞を保存するために、「私たちが人々について知っている他のタイプの情報<sup>139</sup>」を覚えるために使用するものとは異なる、分離して独立した記憶プロセスを使用している可能性がある、と結論付けている。機能している神経メカニズムが何であれ、「あなたはしばしばその人のさまざまな経歴を詳細 (biographical details) に思い出すことができるかもしれないが、それでも[記憶にある]彼または彼女の顔に名前をつけること[思い出すこと]ができない<sup>140</sup>」。

一般的に、頻繁にまたは最近使った名前であれば、簡単に名前を思い出すことができるものの<sup>141</sup>、それにもかかわらず、私たちは「非常によく知っている」人々の名前を忘れることがしばしばある。長年知っている人々の名前でさえもそうである<sup>142</sup>。メンタルブロックに関するある研究では、被験者の記憶の欠落の大半が友人や知人の名前であることが判明した<sup>143</sup>。その結果、研究者は「固有名詞は単に覚えるのが難しいだけでなく…よく覚えていたとしても、取り出すことが難しい」と指摘している<sup>144</sup>。

この発見を説明するために提案された1つの仮説は、固有名詞は「意味が、仮にあるとしても、ほとんどないため覚えるのが困難である」というものである<sup>145</sup>。意味を持っている言葉は、私たちの脳の中で他の関係する情報のポケットとつながっており、その関連情報を思い起こしたことをきっかけに、思

---

<sup>135</sup> 前掲注 131 Kramer 1991, 487.

<sup>136</sup> G. Cohen and D. Faulker, 'Memory for proper names: Age differences in retrieval' (1986) 4 *British Journal of Developmental Psychology* 187-97 (Abstract); D. M. Burke, D. G. MacKay, J. S. Worthley & E. Wade, 'On the tip of the tongue: What causes word finding failures in young and older adults?' (1991) 30 *Journal of Memory and Language* 542-79.

<sup>137</sup> 前掲注 33 J. R. Hanley & G. Cohen, 'Memory for people: Faces, names, and voices' in Cohen 2008, 107-40 at 127.

<sup>138</sup> G. Cohen, 'Why is it difficult to put names to faces?' (1990) 81 *British Journal of Psychology* 287-97 at 287; 前掲注 136 Burke 1991. 一方で、これらの研究の手法については、他の研究者が注意を喚起している。次を参照のこと、同上 Hanley 2008, 131.

<sup>139</sup> 同上 Hanley 2008, 126.

<sup>140</sup> 前掲注 138 Cohen 1990, 287.

<sup>141</sup> 前掲注 137 Hanley 2008, 132.

<sup>142</sup> 前掲注 136 Burke 1991, 556, 572.

<sup>143</sup> 前掲注 136 Cohen 1986 ; 前掲注 137 Hanley 2008, 131.

<sup>144</sup> 前掲注 136 Burke 1991, 562.

<sup>145</sup> 前掲注 138 Cohen 1990, 289; 前掲注 136 Burke 1991, 570.

い出されることがよくある。しかし、固有名詞は意味を持たないため、あるいは（ハンター（Hunter）やテイラー（Taylor）などのように）、「実際の個人情報と無関係、無意味、または矛盾する」別の意味を持っているため「習慣的に無視」しており<sup>146</sup>、それら[固有名詞]には、「他の種類の[脳に]保存された個人情報に関する知識と関連付けることを可能にする意味的な関連性が不足している<sup>147</sup>」。

疑うまでもなく、名前を記憶する能力には幅広い個人差がある<sup>148</sup>。しかし、多くの人々はそれがまったく得意でなく<sup>149</sup>、むしろ相当苦手であり、医療の専門家にとって、例えば患者が[人や物の]名前を記憶する力が低いことが、単に日常の記憶力の問題の結果であるか、それとも深刻な記憶障害の兆候であるか判断することが難しい場合がある。言い換えれば、名前の記憶に関しては、「正常なパフォーマンスと病的なパフォーマンスの境界が曖昧になる」ほどに、私たちの多くが相当に障害を持っているのである<sup>150</sup>。

私たちは友人や知人の名前ですえ忘れることが多く、一般的に固有名詞を覚える能力が非常に低く、しばしば病的な損傷に似通っていることがあるにもかかわらず、カナダ移民・難民委員会は少なくとも2人の申請者について、かれらが出国した時の船の名前を覚えていなかったために、かれら[の供述]を信じなかった<sup>151</sup>。またある者は、彼に証拠を要求してきた警察官の名前を挙げられなかったために<sup>152</sup>、またある者は何年も前に一緒に投獄されていた他の囚人の名前を思い出せなかったために、信じてもらえなかった<sup>153</sup>。研究はそのような判断は全く不合理であることを示唆している。

## 2.6 逐語的記憶 (Verbatim memory)

「会話を記憶に留めるとき、人々は何を覚えるのだろうか？」<sup>154</sup>。

研究者は「要点の記憶」（「内容の記憶」）<sup>155</sup>と「逐語的記憶」（「【言語的】構造の記憶」）<sup>156</sup>とを区別する。かれらは、これらの2つの異なるタイプの記憶は、脳内に「独立して表現され、保存」され、そして「互いに分離している」<sup>157</sup>と結論付けている。それは、[要点記憶と逐語的記憶は]その一方を、もう一方なしに思い出すことが可能であることを意味している。

多くの研究は、逐語的記憶と要点の記憶には「生存率の違い」があることを示している<sup>158</sup>。短い時間しか経過していない場合でも、正確な言い回しを記憶する私たちの能力は、しばしば「驚くほど貧弱」

---

<sup>146</sup> 同上 Cohen, 295.

<sup>147</sup> 同上 296.

<sup>148</sup> 前掲注 137 Hanley 2008, 136.

<sup>149</sup> 同上。

<sup>150</sup> 同上。

<sup>151</sup> *Frejste v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [2009] FCJ No. 831; *Goloman v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [2001] FCJ No. 1155.

<sup>152</sup> *Abbase v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [2000] FCJ No. 377.

<sup>153</sup> *Amaya v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [2005] FCJ No. 1685.

<sup>154</sup> L. Campos & M. Alonso-Quecuty, 'Remembering a criminal conversation: Beyond eyewitness testimony' (2006) 14 *Memory* 27-36 at 28.

<sup>155</sup> M. E. Lamb, Y. Orbach, K. J. Sternberg, I. Hershkowitz & D. Horowitz, 'Accuracy of investigators' verbatim notes of their forensic interviews with alleged child abuse victims' (2000) 24 *Law & Human Behavior* 699-708.

<sup>156</sup> 同上。

<sup>157</sup> C. J. Brainerd & V. F. Reyna, 'Fuzzy-trace theory and memory development' (2004) 24 *Developmental Review* 396-439 at 402; 次を参照のこと、前掲注 155 Lamb 2000.

<sup>158</sup> 同上 Brainerd 2004, 403-4.

<sup>159</sup>または「極めて貧弱」<sup>160</sup>である。それは、正確な言い回しが重要な場面であってもそうである。つまり、逐語的記憶は「非常に脆く、数分から数秒で忘れてしまう」<sup>161</sup>。ある実験室での研究によると、逐語的記憶は、「たった40音節（12.5秒に等しい<sup>162</sup>）の邪魔が入ったあと」で消えてしまう。その結果、私たちが会話を記憶する時は、通常は要点の記憶だけであり、「会話の意味論的性質のみが長期的な記憶に書き直される<sup>163</sup>」。これは一風変わった、または予期しない会話についても当てはまる。会話が驚くべき内容である場合は、その会話の要点を記憶する能力を向上させる可能性があるが、逐語的記憶の向上にはつながらず、これまで通り弱いままである<sup>164</sup>。

前述で提起された問いに対する簡潔な答えは、会話を思い出す時、私たちは「要点を思い出す傾向があり、発言の逐語的記憶を思い出すことはほとんどない。」<sup>165</sup>ということである。難民認定の判断者は、申請者が口頭でのやり取りの正確な言い回しを思い出すことができると期待することはできないのである。

### 3. 一貫性 (Consistency)

難民認定申請者が「思い出せない」ことと、その申請者の話が変遷していくことは、まったく別のことである。難民認定審査者が申請者の記憶の欠落を許容できる場合であっても、ほとんどの場合申請者の供述に対しては高度な一貫性を期待している。申請者は、IRB のヒアリングに出席する前に、他の経歴情報とともに、「カナダで庇護を求めるようになったすべての重要な出来事と理由」を質問票に記入する必要がある。申請者の信憑性は、口頭での供述とその書面の内容の一貫性に基づいて評価される<sup>166</sup>。一貫性がある話こそが真実の物語であり、そうでなければその逆であると信じているのは、難民認定審査者だけではない。警察官、検察官、裁判官、そして一般市民もほとんどが同じことを考えるであろう<sup>167</sup>。

---

<sup>159</sup> K. Pezdek & M. Prull, 'Fallacies in memory for conversations: Reflections on Clarence Thomas, Anita Hill, and the like' (1993) 7 *Applied Cognitive Psychology* 299-310 at 299.

<sup>160</sup> 前掲注 154 Campos 2006, 33; 同様に次も参照のこと, J. B. Miller, P. de Winstanley & P. Carey, 'Memory for conversation' (1996) 4 *Memory* 615-31.

<sup>161</sup> G. A. Radvansky, 'Situation models in memory: Texts and stories' in Cohen 2008, above n. 33, 228-47 at 229.

<sup>162</sup> 前掲注 159 R. G. Crowder, *Principles of learning and memory* (Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum, 1976) in Pezdek 1993, 300.

<sup>163</sup> 同上 Pezdek.

<sup>164</sup> 同上 308.

<sup>165</sup> 前掲注 154 Campos 2006, 35; 次も参照のこと、前掲注 160 Miller 1996.

さらに、ナイサーのジョン・ディーオンに関する研究が示すように、一連の会話を記憶するときには、特定の段階の要点ではなく、全体の要点を記憶することがある。「彼は1つのエピソードの「要点」をそれ自体として覚えているのではなく、一連の出来事全体の共通の特徴を覚えているのである。」前掲注 105 Neisser 1981, at 20.

<sup>166</sup> IRB が難民保護部門の新メンバー向けのトレーニング資料のなかで、「信頼できる供述の推定用のテストツール (Tools for Testing Presumption of Credible Testimony)」という見出しの下で、初めに挙げられている項目は「供述の矛盾」である。IRB, 'Reasons for Decision: RPD New Member Training: Training Materials' *Learning and Professional Development*, June 2007, 13.

<sup>167</sup> 次を参照のこと, L. A. Strömwall, P. A. Granhag, A.-C. Jonsson, 'Deception among pairs: "Let's say we had lunch and hope they swallow it!"' (2003) 9 *Psychology, Crime & Law* 109-24 at 110-11; N. Brewer & A. Burke, 'Effects of testimonial inconsistencies and eyewitness confidence on mock-juror judgments' (2002) 46 *Law & Human Behavior* 353-64; N. Brewer & R. M. Hupfeld, 'Effects of testimonial inconsistencies and witness group identity on mock-juror judgments', (2004) 34 *Journal of Applied Social Psychology* 493-513. ある調査によると、スウェーデン移民委員会の

しかし、警察官や検察官、裁判官による信憑性評価の「成功率は偶然のレベルをわずかに超える程度でしかなく」、一般市民との違いは見られない<sup>168</sup>。この低い成功率についてよく用いられる説明の1つは、嘘を探り当てることを職業としている人々も一般の人々も、同様に「一貫性ヒューリスティック (consistency heuristic)」、つまり「一貫性があることは真実を意味し、一貫性がないことは虚偽を意味する」という[経験則に基づく]考え方に依拠しているということである<sup>169</sup>。実際に、現在の研究で次々と証明されていることは、真実の説明も虚偽の説明も、「長期間に亘ってどちらも同じように一貫している」ということである<sup>170</sup>。それは、ほとんどの場合「嘘つきは前の審問で語ったことを思い出そうとし、一方で真実を語る者も実際に経験したことを思い出そうとする」からである<sup>171</sup>。一般的に信じられていることに反して、こうしたこと[(嘘であれ真実であれ)一貫した供述を行うこと嘘を見抜き、真実を見極めること]は共に難しい作業である<sup>172</sup>。

真実を語る人々にとって、同じ出来事を一貫した方法で語ることがしばしばとても難しい理由を説明するためには、2つの知見が役立つ。第一に、すでに述べたように、すべての記憶は再構成されたものであり、ある種の情報を再構成することは簡単ではないということである。ある出来事が起こった日付を思い出したり、その期間や頻度を説明したりする場合、私たちは推定している。会話について伝える時には、一語一語を忠実に復唱するのではなく<sup>173</sup>、自分の言葉で語るのである<sup>174</sup>。その後、数週間、数か月、数年が経過してから、同じ経験について、日付を述べる、あるいはどのような出来事だったのかをもう一度述べるように求められた場合、私たちは改めて推定したり、あるいは説明したりするであろう。そして、これまでとは別の数字を思いついたり、別の言葉を使用したりするかもしれない。それは通常、

---

メンバーはこの見解を共有しており、研究者は「スウェーデンの移民委員会の委員の思い込みが、他の西側[諸国]の移民委員会の委員と異なると期待する理由は何もない」と述べている。P. A. Granhag, L. A. Strömwall & M. Hartwig, 'Granting asylum or not? Migration Board personnel's beliefs about deception' (2005) 31 *Journal of Ethnic and Migration Studies* 29-50 (Granhag, Migration) at 47.

<sup>168</sup> 次を参照のこと、M. Hartwig, P. A. Granhag, L. A. Strömwall, 'Guilty and innocent suspects' strategies during police interrogations' (2007) 13 *Psychology, Crime & Law* 213-27 at 213; 次も参照のこと。P. A. Granhag & L. A. Strömwall, 'Effects of preconceptions on deception detection and new answers to why lie-catchers often fail' (2000) 6 *Psychology, Crime & Law* 197-218.

<sup>169</sup> 前掲注 167 Strömwall 2003, 121; P. A. Granhag & L. A. Strömwall, 'Repeated interrogations – Stretching the deception detection paradigm' (1999) 7 *Expert Evidence* 163-74; 前掲注 167 Granhag, Migration 2005.

<sup>170</sup> P. A. Granhag & L. A. Strömwall, 'Repeated interrogations: Verbal and non-verbal cues to deception' (2002) 16 *Applied Cognitive Psychology* 243-57 at 255; P.A. Granhag, L. A. Strömwall & A.-C. Jonsson, 'Partners in crime: How liars in collusion betray themselves' (2003) 33 *Journal of Applied Social Psychology* 848-68; 同上 Granhag 1999.

<sup>171</sup> 同上 Granhag 2002, 245; 前掲注 168 Hartwig 2007.

<sup>172</sup> ペアで証言する場合は例外である。これは、「共謀している嘘つきは、計画が重要であることを知っている」ことを示唆している。Granhag 2003, above n. 170, 850; W. A. Wagenaar & A. Dalderop, 'Remembering the zoo: A comparison of true and false stories told by pairs of witnesses' (1994), unpublished manuscript, Department of Experimental Psychology, Leiden University, The Netherlands, in Granhag 2003, above n. 170; Strömwall 2003, above n. 167.

<sup>173</sup> 前掲注 154 Campos 2006, 33.

<sup>174</sup> 最近、ある著名な研究者は「再び話すことは思い出そうと同じではない」と題する研究で、私たちが会話形式で自分の経験を語る時、より構造化された記憶テストの場合のように正確に思い出そうとするのではなく、ただそれらを「再話する (retell)」と指摘した。実験室の外では、私たちは「ある出来事の詳細ではなく、意味の核心に焦点を当てる傾向」がある。このため、変化に富む日常の状況下で、真実で大まかに正確な再話をすることは、臨床的な観点からは著しく不正確になる可能性がある。E. J. Marsh, 'Retelling is not the same as recalling: Implications for memory' (2007) 16 *Current Directions in Psychological Science* 16-20 at 16, 17.

申請者が信頼できないと判断されることにつながる。例えば、脅迫的な電話を3回受けた（または4回だった？）<sup>175</sup>、6月末に逮捕された（または7月上旬だった？）<sup>176</sup>、会話中に自分を非難した人がある事実を公然と述べた（またははっきりと仄めかした？）<sup>177</sup>。委員会のメンバーは「あなたはその時[1回目の供述時]に嘘をついていたのか、それとも今嘘をついているのか？」という典型的な問いかけをすることだろう。それは「一貫性ヒューリスティック（Consistent heuristic）」の典型的でかつ見当違いな「機械的」<sup>178</sup>適用である。このことは、「容疑者の嘘を見破ろうとする場合、いくつもの連続した陳述（consecutive statements）を得た人の方が、一つの陳述しか得なかった人に比べてよい成績をあげられなかった」というある研究結果の説明となりそうである<sup>179</sup>。

第二に、以下に示すように、時間とともに人の記憶、つまり人の話は変化し、場合によっては大幅に変化する可能性がある。これは、十分に立証されている記憶に関する作用のためである。ある記憶は消滅したり歪んだりする一方で、ある記憶はより強烈になって行く。情報の喪失と獲得は「記憶の仕組みの典型」である<sup>180</sup>。その結果として、その人が以前に経験した出来事を繰り返し思い出すとする真実の語り手も、時間の経過とともに情報を得たり、失ったり、そして変化させたりする<sup>181</sup>。このことから、「目撃者の記憶に関する研究の権威」であるロフトス（Loftus）<sup>182</sup>は、法廷での宣誓は「真実、すべての真実、もしくはそれが何であれあなたが覚えていると思うことを述べる、と誓いますか」に変えるべきだと、真剣に提唱している<sup>183</sup>。

次節では、記憶一般に関するこうした効果に言及し、次に申請者がしばしば述べる衝撃的で心を乱すような記憶に特に目を向けることにしたい。なぜなら、「強いストレスと感情を伴った経験は、消すことのできない記憶を残す」という、よくある誤解があるためである<sup>184</sup>。実際に、以下で説明するように、難民認定における標準的な審査環境は、申請者の記憶がこれから述べるような変化に対して特に脆弱であることを確認するのに役立つ。

---

<sup>175</sup> *Quevedo v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2006] FCJ No. 1585 at para. 24.

<sup>176</sup> 前掲注 27 *Ojo*.

<sup>177</sup> *Taboada v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2008] FCJ No. 1395.

<sup>178</sup> 前掲注 167 Strömwall 2003, 121.

<sup>179</sup> 前掲注 169 Granhag 1999, 163. 信憑性を測る尺度として一貫性に頼ることにに対しては、さらなる注意が研究で指摘されている。一貫性は、大部分において見る人の目による。一貫性を調査したいくつかの研究が明らかにしてきたことは、被験者の発言が一貫しているかどうかに関して、研究者たちとその助手たちの間でしばしば「実質的な不一致（substantial disagreement）」があるということである。例えば、ある一連の供述について、78人の助手の半数は一貫性があると判断し、半数は一貫性がないと判断したのである。前掲注 168 Granhag 2000, 211, 215; 次も参照のこと。S. Porter, J. C. Yuille & D. R. Lehman, 'The nature of real, implanted and fabricated memories for emotional childhood events: Implications for the recovered memory debate' (1999) 23 *Law & Human Behavior* 517-37 前掲注 169 in Granhag 1999. このレベルの主観性は、信憑性を評価するツールとして一貫性の価値をさらに損なうことになる。

<sup>180</sup> J. W. Turtle & J. C. Yuille, 'Lost but not forgotten details: Repeated eyewitness recall leads to reminiscence but not hypermnnesia' (1994) 79 *Journal of Applied Psychology* 260-71 at 269.

<sup>181</sup> 前掲注 170 Granhag 2003; S. J. Anderson, G. Cohen & S. Taylor, 'Rewriting the Past: Some factors affecting the variability of personal memories' (2000) 14 *Applied Cognitive Psychology* 435-54 at 450.

<sup>182</sup> S.-A. Christianson, 'Emotional stress and eyewitness memory: A critical review' (1992) 112 *Psychological Bulletin* 284-309 at 285.

<sup>183</sup> R. Fordham, 'What do you remember?', *BBC News*, June 6 2008.

<sup>184</sup> 前掲注 33 Williams 2008, 78.

### 3.1 記憶の喪失 (Losses)

当然のことながら、多かれ少なかれ自伝的記憶の「直線的喪失 (linear loss)」を私たちが経験するだろうということは、記憶の研究によって確認されている<sup>185</sup>。通常、私たちの記憶は時間の経過とともに、特異性を失い、より漠然としたものになっていき、過去の記憶は不鮮明でアクセスしにくくなりがちである。私たちは自分の記憶に対し、しばしば見当違いなほど強い自信を保っているものの、実際にはその正確性は失われていく<sup>186</sup>。時間が経つほどに、私たちは過去を忘れ、「重要な部分」さえも忘れてしまう<sup>187</sup>。ある有名な研究において、ある研究者は、彼[自分]の日常生活の詳細な記録を残し、自分が確実に覚えているだろうと感じた「重要な」事実特別な注釈を残しておいた。1年後に自分の記憶を試した時、彼はそれらのうち20%について全く憶えていなかった。そして5年後には、この数字は60%にまで上昇したのである<sup>188</sup>。

私たちが失う情報の割合を大きくする要因の一つは、関連のある他の情報を頭の中で何度も復唱してしまうことである。次節で説明するように、私たちがある事柄を思い出す頻度が多ければ多いほど、それについて思い出そうとすればするほど、より多くの細かな記憶が蘇ってくる。一般に「復唱された情報は、そうではない情報よりもよりよく記憶される」<sup>189</sup>。しかし、ある特定の面に向けられた注意と同様に、特定の面を記憶することには代償が伴う。記憶している出来事であっても、その中で集中していなかった側面については、より一層忘れやすくなるのである。この効果を説明するために、さまざまな認知理論が提案されている。それらは、「検索競合 (retrieval competition)」または「検索誘導性忘却 (retrieval-induced forgetting)」として知られている<sup>190</sup>。原因が何であれ、この非自発的な作用は非常に頑強で一般的な現象であるようだ<sup>191</sup>。この作用は、実験室における様々な実験だけでなく<sup>192</sup>、目撃者や自伝的記憶についての諸研究においても証明されているのである。

---

<sup>185</sup> 前掲注 109 Belli 2001, 46.

<sup>186</sup> 前掲注 14 Barclay 1986, 99, 101; 前掲注 33 Williams 2008, 81.

<sup>187</sup> 前掲注 46 Bradburn 1987, 158.

<sup>188</sup> 前掲注 13 Wagenaar 1986. 次も参照のこと。同上 Bradburn 1987; 前掲注 13 Linton 1975; C. D. B. Burt, S. Kemp & M. Conway, 'What happens if you retest autobiographical memory 10 years on?' (2001) 29 *Memory & Cognition* 127-36.

<sup>189</sup> 前掲注 174 Marsh 2007, 18.

<sup>190</sup> M. C. Anderson, 'Rethinking interference theory: Executive control and the mechanisms of forgetting' (2003) 49 *Journal of Memory and Language* 415-45 at 424-5; K.-H. Bäuml, M. Zellner & R. Vilimek, 'When remembering causes forgetting: Retrieval-induced forgetting as recovery failure' (2005) 31 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition* 1221-34; M. D. MacLeod & C. N. Macrae, 'Gone but not forgotten: The transient nature of retrieval-induced forgetting' (2001) 12 *Psychological Science* 148-52; M. MacLeod, 'Retrieval-induced forgetting in eyewitness memory: Forgetting as a consequence of remembering' (2002) 16 *Applied Cognitive Psychology* 135-49; J. Saunders & M. D. MacLeod, 'New evidence on the suggestibility of memory: The role of retrieval-induced forgetting in misinformation effects' (2002) 8 *Journal of Experimental Psychology: Applied* 127-42; M. D. MacLeod, J. Saunders & L. Chalmers, 'Retrieval-induced forgetting: The unintended consequences of unintended forgetting' in G. M. Davies & G. B. Wright (eds.), *Current Issues in Applied Memory Research* (New York: 2010), 50-71.

<sup>191</sup> 同上 Bäuml 2005, 1221.

<sup>192</sup> 例として次を参照のこと, M. C. Anderson, R.A. Bjork & E. L. Bjork, 'Remembering can cause forgetting: Retrieval dynamics in long-term memory' (1994) 20 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 1063-87; B. Spitzer & K.-H. Bäuml, 'Retrieval-induced forgetting in item recognition: Evidence for a reduction in general memory strength' (2007) 33 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 863-75.



ある有名な目撃者の実験では、被験者は犯罪現場のスライドを見せられた後、半分の被験者は特定の要素を記憶するように努めるように指示を受けた。すべての被験者が、目撃したことについて可能な限り思い出すように求められた時に、指示を受けた被験者たちは、かれらが記憶しようと努めた特定の要素についてはとてもよく思い出すことができた。だが、一般的な場面については、わずかにしか思い出すことができなかつた<sup>193</sup>。常にではないものの、同じ効果はその他の目撃者の研究でも繰り返し示されている<sup>194</sup>。同様の結果は自伝的記憶においても報告されており<sup>195</sup>、これらの報告により、一部の研究者は「自伝的記憶を検索することは、無意識的に、そしてほとんど必然的に、他の[関連する]記憶を抑制する」と結論付けている<sup>196</sup>。例えば、被験者が主題と関連する一連の記憶を思い出すことを求められたあとで、これらの記憶の一部だけについてだけ[思い出す]練習をすると、練習をしなかつた記憶については思い出すことが著しく困難となるのである<sup>197</sup>。

これらは、研究者のみならず法廷にとっても示唆的な調査結果である。研究者は、証人に尋問する際に警察や弁護士が使用する方法が「実験室で強力な検索誘導性忘却効果(retrieval-induced forgetting effects)を生み出すことが示された、まさにその環境を生じさせている」ことに注目している<sup>198</sup>。実際に「警察の尋問の頻度と強度」は、「実験室においてよりも大きい」影響を引き起こしている可能性があると考えられる研究者もいる<sup>199</sup>。少なくとも実験室の環境下においては、繰り返し行われる目撃者への尋問は、目撃者の記憶のある部分の想起を強め、一方で他の部分の忘却を引き起こす変化を生じさせることが示された<sup>200</sup>。「事件に関して、証人の詳細な説明を引き出すために使われた、まさにその行為が記憶のゆがみを現実に生じさせることは皮肉なことである。」<sup>201</sup>

難民認定の判断者は、多くの場合、自発的に詳細な情報を提供する能力に照らして申請者の信憑性を評価する。よく訓練された[IRB の]委員は、申請者が最初に提出した書類の四隅[書類に記載された詳細な内容]を超えて話をできるかを確認しようとするであろう。しかしながら、[このことにより]申請者は、

---

<sup>193</sup> J. S. Shaw III, R. A. Bjork & A. Handal, 'Retrieval-induced forgetting in an eyewitness-memory paradigm' (1995) 2 *Psychonomic Bulletin & Review* 249-53.

<sup>194</sup> 次を参照のこと。前掲注 190 MacLeod 2002; M. D. MacLeod & J. Saunders, 'The role of inhibitory control in the production of misinformation effects' (2005) 31 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition* 964-79; 同時に次も参照のこと。B. J. A. Hauer, I. Wessel, H. Merckelbach, A. Roefs & T. Dalgleish, 'Effects of repeated retrieval of central and peripheral details in complex emotional slides' (2007) 15 *Memory* 435-49.

<sup>195</sup> I. Wessel & B. J. A. Hauer, 'Retrieval-induced forgetting of autobiographical memory details' (2006) 20 *Cognition & Emotion* 430-47; A. J. Barnier, L. Hung & M. A. Conway, 'Retrieval-induced forgetting of emotional and unemotional autobiographical memories' (2004) 18 *Cognition and Emotion* 457-77.

<sup>196</sup> 同上 Barnier 2004, 469.

<sup>197</sup> 同上; 次も参照のこと。前掲注 194 McLeod 2005。一部の研究者は、これらの調査結果と「侵入的記憶 (intrusive memory)」(フラッシュバック)と「過度に一般的な記憶 (over-general memory)」(曖昧で詳細に欠けている記憶)との相関を示した他の研究との関連を示唆している。トラウマを鮮明に覚えていて、繰り返しかえし思い出す人は、一般的に記憶が乏しいことが多く、この効果は「RIF [検索誘導による忘却]に似た現象」によって引き起こされる可能性があるという指摘する研究者もいる。私たちの心が一連の非・自発的なトラウマ記憶にとらわれる時、他の記憶に対する私たちの想起は損なわれるかもしれないのである。前掲注 195 Wessel 2006, 432; A. R. Moradi, J. Herlihy, G. Yasseri, M. Shahraray, S. Turner & T. Dalgleish, 'Specificity of episodic and semantic aspects of autobiographical memory in relation to symptoms of posttraumatic stress disorder (PTSD)' (2008) 127 *Acta Psychologica* 645-53.

<sup>198</sup> 前掲注 190 MacLeod 2002, 145-6.

<sup>199</sup> 前掲注 193 Shaw 1995, 253.

<sup>200</sup> 同上・249 頁

<sup>201</sup> 前掲注 194 McLeod 2005, 974.

より苦境に立たされるのである。弁護人がいる、若しくは手続きが進められるのかについて申請者が何らかの手がかりを持っている場合、申請者は何の準備もなく何度も繰り返し供述することで生じる、そして[その矛盾を]委員会の委員らが嘘と誤解する、自然な矛盾を最小限にするために、自分の供述を何時間も費やし練習するだろう。しかしながら、そうすることは、委員会が信憑性の指標として用いる細部の記憶の再生を、現実にはより困難にするかもしれないのである<sup>202</sup>。

### 3.2 記憶の獲得 (Gains)

ある研究では、参加者に子どもの頃の記憶を語るように求め、2か月後にもう一度それを語ることを求めた。若い参加者(平均年齢28歳)が述べた内容のうち、1回目と同じ内容であったのは半分未満(46%)であった。年配の参加者(平均年齢72歳)の記憶はもう少し安定していた。かれらの2回目の話は、1回目と同じ情報を58%含んでいた。全体として、被験者の2回目の説明には、約40~60%の新しい情報が含まれていたことになる<sup>203</sup>。

「記憶増加(hypermnnesia)」や「記憶増進(reminiscence)」という用語は、これらの結果を説明する現象を表している。ある出来事を思い出すたびに、より多くのことを思い出すことはよくあることである<sup>204</sup>。被験者が過去の経験をできるだけ詳しく、必要なだけの時間をかけて、そして記憶していることを余すところなく述べることを求められた場合<sup>205</sup>、フォローアップインタビューで再びそのトピックに戻った場合、被験者は2回目の面接が5分後、1日後、あるいは6か月後であろうと、[1回目より]さらに多くの情報を提供することができるのである<sup>206</sup>。

記憶増加に関する初期の実験の1つにおいて、押し込み強盗のビデオを見た被験者は、記憶検索を繰り返すだけで、関連する詳細な説明が平均して38%から61%へと上昇した<sup>207</sup>。その後の研究において、

---

<sup>202</sup> この信憑性評価戦略のメリットは、考慮の価値がないように思われる。真実と嘘に関するいくつかの研究の中には、真実を語る人はより詳細な供述をする傾向があることを発見したものがある。M. Hartwig, P. A. Granhag, L. A. Strömwall & O. Kronkvist, 'Strategic use of evidence during police interviews: When training to detect deception works' (2006) 30 *Law & Human Behavior* 603-19. しかし、「欺く供述は真実の供述よりも詳細ではない」という説を支持しておらず、嘘つきが尋問者を欺こうとするために使用する主要な戦略の一つは、自分の話を可能な限り詳細にすることであると述べている者もいる。前掲注 170 Granhag 2002, 255; 前掲注 220 Hartwig 2007, 220.

<sup>203</sup> 前掲注 181 Anderson 2000.

<sup>204</sup> 「記憶増加(hypermnnesia)」とは「連続した試行における正味の想起の増加」のことであり、忘れてしまった情報が考慮されるのに対して、「記憶増進(reminiscence)」とは、「総記憶力の向上」のことであり、「以前に述べた詳細がどれだけ再び提供されないか」は考慮されない。前掲注 180 Turtle 1994, 261.

<sup>205</sup> 例えば、典型的な研究では、研究者は「できることはすべて教えてください」という最初の指示を出し、その後、厳密な評価のために「他に何か覚えていますか?」「他に何か教えてもらえますか?」「わかりました。それがすべてだと思いますか?」という3つの質問をする。前掲注 22 Bluck 1999, 674.

<sup>206</sup> D. La Rooy, M.-E. Pipe & J. E. Murray, 'Reminiscence and hypermnnesia in children's eyewitness memory' (2005) 90 *Journal of Experimental Child Psychology* 235-54 at 249; 例として次を参照のこと。前掲注 180 Turtle 1994; 前掲注 195 Barnier 2004; D. Dunning & L. B. Stern, 'Examining the generality of eyewitness hypermnnesia: a close look at time delay and question type' (1992) 6 *Applied Cognitive Psychology* 643-57; 前掲注 181 Anderson 2000; 前掲注 22 Bluck 1999; R. P. Kern, T. M. Libkuman & H. Otani, 'Memory for negatively arousing and neutral pictorial (原文ママ) stimuli using a repeated testing paradigm' (2002) 16 *Cognition & Emotion* 749-67.

<sup>207</sup> E. Scrivner & M. A. Safer, 'Eyewitnesses show hypermnnesia for details about a violent event' (1988) 73 *Journal of Applied Psychology* 371-7 at 375.

実験室の外でも同様の結果が得られた。この現象については、警察にインタビューされた犯罪の目撃者が後に研究者によって再インタビューされた時に、被験者が研究者に提供した情報の60%が新しいものだったという事からも明らかにされている<sup>208</sup>。また新しい情報は明らかに正確であった。この知見は必ずではないものの、正確性が計測可能である研究でも主に指摘されており、<sup>209</sup>全体としていえば、記憶増加が「矛盾ない、根拠ある信頼できる現象」であり、繰り返しテストを行うことで最大50%までは十分信頼できる情報を増やすということには、ほとんど議論の余地がない<sup>210</sup>。

これがなぜ生じるのかについて、ある仮説によれば、本人がその作用過程を意識してなくても、「記憶の中で検索を開始すると、最初のタスクが終了した後も検索が続行される」からである<sup>211</sup>。この現象は、私たちが日中に思い出そうとしていた名前を、夜に思い出して目が覚ます理由を説明するのに役立つ。研究者はまた、思い出すという行為が、記憶課題の「要求特性 (demand characteristic)」、つまり、何を質問されたかに関する被験者の印象や、「質問された出来事について語ることで面接官を喜ばせたい」という被験者の欲求に影響されることにも注目している<sup>212</sup>。記憶増加効果は、「人々がすでに与えた情報を繰り返すように求められた際、通常は最初の説明が何らかの意味で不十分であると考え、より詳細を提供することによってこれを修正しようとする」という事実によって形成されている可能性がある<sup>213</sup>。

記憶増加／記憶増進の現象の強さを見て、ある研究者チームが断定的に出した結論は、「法廷において、もし目撃者が情報を追加したことでその証言が一貫性を欠いたとしても、その目撃者を信憑性が低いとみてはならない」ということであった<sup>214</sup>。しかしながら、IRBにおいては、申請者は1回目の供述において「関連するすべての重要な事実を伝えるべき」とされている。[IRBの]委員が些末な、もしくは緻密な詳細の漏れ<sup>215</sup>を見逃すことは想定されているかもしれない。しかし、申請者による2回目以降の供述に何らかの重大な追加情報が（ましてや40～60%の新たな情報が）含まれているとしたら、[供述は]虚偽であるとみなされる可能性が高い。「追憶による[記憶の]非一貫性は自然かつよくあることで、しばしば正しい (Frequently correct)」にもかかわらず、である<sup>216</sup>。

---

<sup>208</sup> この増加の一部は、警官が研究者ほどには「物の記述を要求しなかった」からだという研究者もいる。前掲注 33 Yuille 1986, 294.

<sup>209</sup> 前掲注 22 Bluck 1999; J. A. E. Gilbert & R. P. Fisher, 'The effects of varied retrieval cues on reminiscence in eyewitness memory' (2006) 20 *Applied Cognitive Psychology* 723-39; 前掲注 206 Dunning 1992; 前掲注 207 Scrivener 1988; 前掲注 180 Turtle 1994; 前掲注 110 Herlihy 2002; 同時に次も参照のこと。P. Eugenio, R. Buckhout, S. Kostas & K. E. Ellison, 'Hypermnesia in the eyewitness to a crime' (1982) 19 *Bulletin of the Psychonomic Society* 83-6

<sup>210</sup> 前掲注 206 Dunning 1992, 644, 648.

<sup>211</sup> 前掲注 110 Herlihy 2002, 327.

<sup>212</sup> D. C. Rubin & A. D. Baddeley, 'Telescoping is not time compression: A model of the dating of autobiographical events' (1989) 17 *Memory & Cognition* 653-61.

<sup>213</sup> 前掲注 3 Cohen 2001, 6; 前掲注 3 Herlihy 2009, 181.

<sup>214</sup> 前掲注 206 Kern 2002, 766.

<sup>215</sup> *Akhigbe v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [2002] FCJ No. 332 at para. 16; *Basseghi v. Canada* (Minister of Citizenship and Immigration) [1994] FCJ No. 1867 at para. 33 (emphasis added).

<sup>216</sup> 前掲注 209 Gilbert 2006, 737.

### 3.3 変容 (Distortions)

難民の供述が以前と明らかに矛盾しているのはどのような場合であろうか？きっと嘘をついているのであろうか？

目撃者や自伝的記憶の歪みに関する研究では、通常、同じ被験者に2回インタビューや調査を行う。矛盾は比較的少ないとした研究もあるが<sup>217</sup>、他の多くの研究では2回目のインタビューで被験者が提供した情報の約20%が、1回目のインタビューで報告した内容と明らかに相容れない内容であった<sup>218</sup>。ある研究チームが、武装した強盗が警察に射殺された事件の数ヵ月後に、目撃者に再度インタビューを行ったところ、目撃者の一人は警察には強盗の車は「赤だ」と供述していたが、研究者には「赤か青のどちらかだ」と述べた。

また、別の目撃者は「警察の事情聴取では車はファルコンであったと正確に答えていた」のに、研究者にはシボレーと答えた<sup>219</sup>。また、現場にいた女性について、最初は「不潔な歯で、黄色いセーターと色あせたデニムを着ていた」と述べていたが、後に[2回目のインタビューでは]「赤か黄色のTシャツと新品のデニムを身に着けていて、歯はとても白かった」と答えた人もいた<sup>220</sup>。

このような記憶の変化の境界を明確にする試みは、ほとんど成功していない（例えば、「犯罪者の説明」、「犯罪者の行動」、「傍観者の説明」、「傍観者の行動」、「物」などのカテゴリーとの相関関係はないようである<sup>221</sup>）。また、周辺的な情報は特に変化しやすいようであるが<sup>222</sup>、どのような証言であっても例外ではないようである<sup>223</sup>。このような歪みの原因については盛んに議論がなされているが、臨床研究で得られた知見は、特に難民申請者に関連していると考えられる。

研究者の間では以前より、人から聞いた話は、自分の経験を思い出す能力にプラスにもマイナスにも影響するということが認識されてきた。目撃者同士が犯罪現場の記憶を語り合うと、一人で思い出すよりも正確に描写できることがある<sup>224</sup>。しかし、同じ、または似たような経験をした人と記憶を共有する

---

<sup>217</sup> . Smeets, I. Candel, H. Merckelback, 'Accuracy, completeness, and consistency of emotional memories' (2004) 117 *The American Journal of Psychology* 595-609; Anderson 2000, above n. 181.

<sup>218</sup> R. P. Fisher & B. L. Cutler, 'The relation between consistency and accuracy of eyewitness testimony' in G. Davies, S. Lloyd-Bostock, M. McMurrin & C. Wilson (eds.), *Psychology, Law and Criminal Justice: International Developments in Research and Practice* (New York, 1996) 21-8 at 26; Yuille 1986, above n. 33, 296; N. Brewer, R. Potter, R. Fisher, N. Bond & M. A. Luszcz, 'Beliefs and data on the relationship between consistency and accuracy of eyewitness testimony' (1999) 13 *Applied Cognitive Psychology* 297-313.

<sup>219</sup> 前掲注 33 Yuille 1986, 298. ワシントン DC の狙撃事件では、複数の目撃者が容疑者の車を「白またはクリーム色のバン」と表現したことは有名だが、実際には「紺色のシボレー・カプリス」であった；前掲注 129 Sharps 2007, 22. このようなタイプの誤りは、集中できる実験室の条件下で、63 人の参加者に車の写真を含む認識課題を与えたところ、ターゲットの車両を正しく識別できたのは4分の1以下だったことを考えれば、それほど驚くべきことではないだろう；前掲注 126 Villegas 2005, 27; 次も参照のこと。G. Davies & N. Robertson, 'Recognition memory for automobiles: A developmental study' (1993) 31 *Bulletin of the Psychonomic Society* 103-6. 例えば、ある研究では、男性や少年は、女性や少女よりも自動車をよく認識し、女性や少女は女性の顔をよく認識することがわかったという。これは、男性や男の子は一般に車に関心があり、女性や女の子は一般に...化粧品に関心があるからではないかと研究者は推論している。Davies 1993, 106.

<sup>220</sup> 前掲注 33 Yuille 1986, 298.

<sup>221</sup> 前掲注 218 Brewer 1999, 309.

<sup>222</sup> 前掲注 110 Herlihy 2002, 110.

<sup>223</sup> 前掲注 218 Brewer 1999, 309.

<sup>224</sup> A. D. Yarmey & S. Morris, 'The effects of discussion on eyewitness memory' (1998) 28 *Journal of Applied Social*

と、うっかりその人の記憶の要素が自分の記憶と混ざってしまうこともある。

あるポーランド人研究者は、高校を卒業したばかりの学生に4ヶ月の間隔をおいて2回インタビューを行い、卒業試験と卒業式のパーティーの思い出を語ってもらった<sup>225</sup>。ポーランドでは、それらは人生の節目としてよく知られ、「忘れることができない」行事と考えられている。彼女は、[2回の]インタビューの合間に、別の学生が試験と舞踏会の体験を語っているとされるビデオを見せた。この「学生」は実際には俳優であり、彼女の描写にはいくつもの創作が含まれていた。再度インタビューを行ったところ、30人中29人の学生が、これらの創作された部分を自分の話に取り入れており、時には以前の自分の報告と矛盾するような発言をしていた。創作された14個の要素のうち、11個が学生の記憶の中に組み込まれていたのである<sup>226</sup>。同様の結果は、犯罪現場の目撃者の記憶に共犯者[の存在]を加えることができるか、あるいは取り除くことができるかについて調べた別の研究でも示された。40人の参加者を2つのグループに分け、表向きには同じ窃盗のビデオを見せた。しかし、実際には、第1グループに見せられたビデオでは窃盗犯が単独で行動していたのに対し、第2グループに見せられたビデオでは窃盗犯に共犯者がいたのである。このビデオを見た後、参加者は個別に調査され、特に「泥棒に共犯者がいたかどうか」が尋ねられた。この個別調査では、40人中39人がこの質問に正しく回答した。次に、もう一方のグループの参加者とペアを組み、その出来事について共同で説明をするように指示された際は、ペアになった19組のうち、15組は共犯者がいたかどうかで意見が一致した。つまり、これは2人のうちどちらかが証言を変えたということである<sup>227</sup>。

この種の「誤報実験 (misinformation experiments)」の参加者は、通常、「自分が証言を変えたことや新しい情報に影響されたことに気づかず」、「自分が観察したことについて、自分自身の記憶を報告していると確信したままである」<sup>228</sup>。被験者は、混合された「記憶」を非常に生き生きと表現する<sup>229</sup>。ある研究によると、記憶に「大きな歪み」が生じた被験者の61%が、自分の記憶の正確さに対して非常に自信を持っていると答えている(5段階評価で4か5を付けている)<sup>230</sup>。研究者たちが指摘するように、これらの被験者は、「[記憶の]鮮明さが正確さに関係している」と信じてしまう罠に陥っている可

---

*Psychology* 1637-48.

<sup>225</sup> A. Niedzwinska, 'Distortion of autobiographical memories' (2003) 17 *Applied Cognitive Psychology* 81-91 at 89.

<sup>226</sup> 同上。

<sup>227</sup> D. B. Wright, G. Self & C. Justice, 'Memory conformity: Exploring misinformation effects when presented by another person' (2000) 91 *British Journal of Psychology* 189-202; 次も参照のこと C. R. Hollin & B. R. Clifford, 'Eyewitness testimony: The effects of discussion on recall accuracy and agreement' (1983) 13 *Journal of Applied Social Psychology* 234-44.

<sup>228</sup> 前掲注 2 Haber 2000; 参照 S. M. Lane & M. S. Zaragoza, 'A little elaboration goes a long way: The role of generation in eyewitness suggestibility' (2007) 35 *Memory & Cognition* 1255-66.

<sup>229</sup> 前掲注 225 Niedzwinska 2003, 89.

<sup>230</sup> H. Schmolck, E. A. Buffalo & L. R. Squire, 'Memory distortions develop over time: Recollections of the O. J. Simpson trial verdict after 15 and 32 months' (2000) 11 *Psychological Science* 39-45. 一般に、記憶については、様々な文脈で、自信と正確さは無関係であることが分かっている例として次を参照のこと、前掲注 224 Yarmey 1998; U. Neisser & N. Harsch, 'Phantom flashbulbs: False recollections of hearing the news about Challenger' in E. Winograd & U. Neisser (eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of flashbulb memories* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1992) 9-31, in S. M. Zola 'Memory, amnesia, and the issue of recovered memory: Neurobiological aspects' (1998) 18 *Clinical Psychology Review* 915-32; I. E. Hyman, Jr. & F. J. Billings, 'Individual differences and the creation of false childhood memories' (1998) 6 *Memory* 1-20 at 16; Brewer 1999, above n. 218.

能性が高い<sup>231</sup>。

研究者たちは、この種の歪みは、「情報源の検出エラー (source monitoring errors)」、つまり「情報源に関しての記憶は、内容の記憶よりも急速に減退する」ことによって引き起こされると理論づけている<sup>232</sup>。別の言い方をすれば、「ある出来事の最中に直接観察した情報と、その出来事について後で聞いた情報の両方を持っていると、どちらがどちらかが思い出せなくなる」ということである<sup>233</sup>。日常生活では、このように記憶がまじりあってしまう事を避けることはできないかもしれない。結局のところ、「日々の生活は進行中の誤報実験」なのである<sup>234</sup>。難民申請者はしばしばシェルターに滞在しており、その中で同じような経験をした人と知り合うことがある。もしかかれらが互いに自分の話をする事になれば、それがかれらの記憶に影響を与えるであろう。

さらに、自分の過去の考えや感情の記憶は非常に変化しやすく、時間の経過とともに、この種の記憶は特に「変化する可能性が高い」<sup>235</sup>。12人の学校職員を対象に、銃乱射事件を生き延びた半年後と1年半後に調査を行なった注目すべき調査がある。銃撃を受けた時の思考や感情については、全員が報告内容を大きく変えていた。多くの人は、以前に回答した特定の反応（気分が悪くなった、心配になった、怒りを感じたなど）があったことを2回目の回答では否定した。また、1回目にははっきりと否定したにもかかわらず、2回目にはそのような思考や感情を経験したと主張する人もいた。「自分や愛する人にも起こり得ると思った」との回答は、半数の被験者が変更しており、変更した方向も半数ずつであった<sup>236</sup>。

このような回答の不安定さに対する説明の一つとして、実際には「被験者が考えたことや感じたことを現実に覚えているという証拠はほとんどない」ということが挙げられる<sup>237</sup>。何かの出来事が起こった際と、その後に再び感情の状態を尋ねた研究によると、休暇中にどれだけ幸せだったか<sup>238</sup>、試験中にどれだけストレスを感じたか<sup>239</sup>、また気持ちを動転させるようなニュースを知った時にどれだけ動揺した

---

<sup>231</sup> 前掲注 225 Niedzwinska 2003, 89.

<sup>232</sup> I. E. Hyman, Jr. & E. F. Loftus, 'Errors in autobiographical memory' (1998) 18 *Clinical Psychology Review* 933-47 (Hyman, Errors) at 938-9; see also, M. K. Johnson & C. L. Raye, 'Reality monitoring' (1981) 88 *Psychological Review* 67-85.

<sup>233</sup> 前掲注 2 Haber 2000, 1069 (emphasis in original).

<sup>234</sup> I. E. Hyman, Jr. & J. Pentland, 'The role of mental imagery in the creation of false childhood memories' (1996) *Journal of Memory and Language* 101-17 at 114.

<sup>235</sup> 前掲注 104 Kemp 2008, 133, さらに、「研究者は、ポジティブな感情もネガティブな感情も時間とともに薄れるが、後者の方が早く薄れることを頻繁に報告している」。

<sup>236</sup> E. D. Schwartz, J. M. Kowalski & R. J. McNally, 'Malignant memories: Post-traumatic changes in memory in adults after a school shooting' (1993) 6 *Journal of Traumatic Stress* 545-53.

<sup>237</sup> Hyman, Errors 1998, above n. 232, 942; see also, L. J. Levine & M. A. Safer, 'Sources of bias in memory for emotion' (2002) 11 *Current Directions in Psychological Science* 169-73; B. L. Fredrickson & D. Kahneman, 'Duration neglect in retrospective evaluations of affective episodes' (1992) 65 *Journal of Personality and Social Psychology* 45-55; L. J. Levine, 'Reconstructing memory for emotions' (1997) 126 *Journal of Experimental Psychology: General* 165-77; D. L. Thomas & E. Diener, 'Memory accuracy in the recall of emotions' (1990) 59 *Journal of Personality and Social Psychology* 291-9.

<sup>238</sup> 前掲注 104 Kemp 2008.

<sup>239</sup> R. E. Smith, T. R. Leffingwell, J. T. Ptacek, 'Can people remember how they coped? Factors associated with discordance between same-day and retrospective reports' (1999) 76 *Journal of Personality and Social Psychology* 1050-61.

か、心配したか、悲しかったか、怒ったかなどを<sup>240</sup>、私たちは確実に覚えていることが示されている。研究者たちは、記憶からそのような情報[過去の思考や感情]にアクセスできない時、自己概念 (self concept) が「ギャップを埋める」との考えを提案している<sup>241</sup>。つまり、無意識のうちに、自分について知っていることを使って、自分が何を考え、どのように感じたかを推測する、と言うのである。自己概念が変化するにつれて、推論も変化する<sup>242</sup>。難民申請者は、新しい環境に適応しようとして、自己概念が急速に変化している人生のまさにその時期に、過去の思考や感情について徹底的に質問される。このような記憶は、特に変化しやすいと考えられる十分な理由があるのである。

難民申請者にとって特に重要なもう1つの研究結果がある。一般的にネガティブな出来事はポジティブな出来事よりもよく記憶されるといいういくつかの証拠がある<sup>243</sup>が、それにもかかわらず、衝撃的で気持ちを動揺させるような出来事の記憶も歪みから免れられないというのは確かな事実である。今から30年以上前、心理学者のブラウン (Brown) とクーリック (Kulik) は、衝撃的で通常はネガティブな出来事の異常に鮮明な記憶を「閃光記憶 (flashbulb memory)」と名付けたことでよく知られている。この言葉は、誤解を招く恐れがある。それは近年、他の研究者たちが指摘しているように、ブラウンとクーリックでさえ、「このような記憶は、鮮明ではあるが、決して完全ではなく、過去の経験の完璧で不変な写真ではない」という点に合意しているのである<sup>244</sup>。むしろ、「閃光記憶は、他の記憶と同じように、時間の経過とともに再構成されたり、誤りが発生したりするよう<sup>245</sup>」であり、「本人が知らないうちに、時間の経過とともに変化することがよくある<sup>246</sup>」。これまでの閃光記憶に関する研究を包括的にレビューした最近の報告では、閃光記憶が歪む可能性があることについては「すべての研究者が同意している」<sup>247</sup>、他の種類の自伝的記憶よりも一貫性があるかどうかについては、依然として議論の対象となっている<sup>248</sup>。一部の研究者は、衝撃的で感情的な出来事の記憶が「顕著な持続性、明瞭性、詳細性を示す」実例を記録している<sup>249</sup>。しかし一方で、閃光記憶は「その鮮明さと記憶を持つ人の確信度によって通常

---

<sup>240</sup> S.-A. Christianson & E. Engelberg, 'Memory and emotional consistency: The MS *Estonia* ferry disaster' (1999) 7 *Memory* 471-82; L. J. Levine, C. K. Whalen, B. Henker & L. D. Jamner, 'Looking back on September 11, 2001: Appraised impact and memory for emotions in adolescents and adults' (2005) 20 *Journal of Adolescent Research* 497-523.

<sup>241</sup> 前掲注 234 Hyman 1996, 104; 前掲注 239 Smith 1999, 1059.

<sup>242</sup> これは、他の記憶の文脈で「後知恵バイアス」 (hindsight bias) を実証した他の研究とも一致する。これらの研究は、「これらの研究は、「記憶は現在の信念や態度と一致するように改変される可能性がある」こと、「不随意的なプロセスを通じて、私たちの記憶は後の経験に照らして編集される可能性がある」ことを示している。前掲注 33 Williams 2008, 78.

<sup>243</sup> 次も参照のこと, G. S. Goodman & A. Melinder, 'The development of autobiographical memory: A new model' in S. Magnussen & T. Helstrup (eds.), *Everyday Memory* (New York: 2007), 111- 34 at 117.

<sup>244</sup> . Julian, J. N. Bohannon III & W. Aue, 'Measures of flashbulb memory: Are elaborate memories consistently accurate?' in O. Luminet & A. Curci (eds.) *Flashbulb Memories: New issues and new perspectives* (New York: 2009), 99-122 at 99.

<sup>245</sup> R. Fivush, J. Bohanek, K. Marin & J. McDermott Sales, 'Emotional memory and memory for emotions' in Luminet 2009, *ibid.*, 163-84 at 163.

<sup>246</sup> R. J. McNally, *Remembering Trauma* (Cambridge: 2003), 55.

<sup>247</sup> D. B. Pillemer, "Hearing the news" versus "being there": Comparing flashbulb memories and recall of first-hand experiences' 前掲注 244 in Luminet 2009, 125-40 at 138.

<sup>248</sup> 前掲注 33 Williams 2008, 69; O. Luminet & A. Curci, 'Introduction' 前掲注 244 in Luminet 2009, 1-9 at 4.

<sup>249</sup> 前掲注 33 Williams 2008, 69; 次も参照のこと, 前掲注 246 McNally 2003, 53-5.

の記憶と区別される」ものの、「正確性、一貫性、保持される期間において通常の自伝的記憶と確かに異なるという証拠はほとんどない」と結論づけている研究者もいる<sup>250</sup>。いずれにしても、このような記憶も時間の経過とともに大きく変化し、「著しく不正確<sup>251</sup>」になる可能性があるという事実は議論の余地がないほどに証明されている。

ある研究では、カナダの大学生を対象に、2001年9月11日に起きた同時多発テロ事件に関する記憶の一貫性を調査した。研究者たちは1400人の学生にテロ攻撃の直後と8ヵ月後に調査を行い、どのようにこのニュースを知ったかを尋ねた。[学生たちは]当時どこにいたか、誰といたか、何をしていたかが質問された。2回目の調査で「全体的な一貫性の程度」は「低かった」。10人に1人以上(11.8%)は、近年の歴史の中ではおそらく一番記憶に残る朝に、どこで誰と何をしていたかをはっきり鮮明な記憶があったが、実際[その記憶]は全ての項目において間違っていた<sup>252</sup>。同じような方法を採用した他の研究では「半年後に個人的な出来事に関して得られた情報のうち、1週間後の記憶と一致したのはわずか65%であった<sup>253</sup>」。他の研究では、9.11の出来事の記憶は、テロ攻撃前の週末における普通の出来事に対する記憶と同程度しか一貫性がなかった<sup>254</sup>。これまでのところ、別の同様の研究において「9.11という出来事のためにその日の自伝的記録が大変詳細で事実と符合するものになることを示す証拠はほとんどない」と結論付けた通りである<sup>255</sup>。

以下に示す研究は、いずれもスペースシャトル・チャレンジャー号爆発事故に関する被験者の記憶を調査した初期の有名な実験にもとづいて行われたものである。チャレンジャー号研究では、1回目は爆発事故があった翌日に、次は2年後に、被験者に対して事故のニュースを聞いた当時の状況を描写するよう求めた。ほとんどの報告は「重要な不一致」を示した。全体でわずか7%の被験者しか完全に一貫した説明をできず、それに対して25%の人は「全ての質問において一貫性がなかった」<sup>256</sup>。被験者の1人は事故の24時間後に以下の通り報告をしていた。

私が宗教のクラスにいた時に、何人かの学生が教室に入ってきてこのニュースについて話し始めた。…そして授業の後、自分の部屋に戻ってその出来事について話しているテレビ番組を観て、その番組を通じて詳細を知った<sup>257</sup>。

---

<sup>250</sup> J. T. Talarico & D. Rubin, 'Flashbulb memories result from ordinary memory processes and extraordinary event characteristics' 前掲注 244 in *Luminet* 2009, 79-97 at 92.

<sup>251</sup> Schmolck 2000 at 39; 次も参照のこと, A. E. van Giezen, E. Arensman, P. Spinhoven & G. Wolters, 'Consistency of memory for emotionally arousing events: A review of prospective and experimental studies' (2005) 25 *Clinical Psychology Review* 935-53 at 937.

<sup>252</sup> J. Lee & N. R. Brown, 'Delay related changes in personal memories for September 11, 2001' (2003) 17 *Applied Cognitive Psychology* 1007-15 at 1013.

<sup>253</sup> M. C. Smith, U. Bibi & D. E. Sheard, 'Evidence for the differential impact of time and emotion on personal and event memories for September 11, 2001' (2003) 17 *Applied Cognitive Psychology* 1054.

<sup>254</sup> J. M. Talarico & D. C. Rubin, 'Flashbulb memories are special after all; in phenomenology, not accuracy' (2007) 21 *Applied Cognitive Psychology* 557-78.

<sup>255</sup> S. R. Schmidt, 'Autobiographical memories for the September 11th attacks: Reconstructive errors and emotional impairment of memory' (2004) 32 *Memory & Cognition* 443-54 at 451.

<sup>256</sup> 前掲注 230 Neisser 1992, 前掲注 251 in van Giezen, 945.

<sup>257</sup> 同上 Neisser, 前掲注 230 in Zola 1998, 926.



以下が同じ被験者の2年後の報告である。

最初に爆発事故の事を聞いた時、私は大学1年生向けの寮の部屋で、ルームメイトと一緒に座って、テレビを見ていた。ニュース速報が入り、私たち2人はとても衝撃を受けた<sup>258</sup>。

同じような結果は、O.J.シンプソン事件の陪審評決が公表された際にも報告された。学生は評決の3日後に調査を受け、15か月後と32か月後に再調査を受けた。15か月後には話の10%が「重大な変容」を含んでおり、32か月後にはその割合が42%まで上がった。典型的な例として、3日後に以下の通り供述したある被験者がいる。

私はレベル【大学】のコンピューターラウンジ（訳注：通勤・通学者のためのスペース）にいて、それをテレビで観た。[判決が公表される]午前10時が近づくと、ラウンジには徐々に多くの人が集まってきた。テレビの音をどんどん大きくしなければいけなかったが、どこかクールだった。みんなが話をしていた<sup>259</sup>。

同じ被験者は32か月後に次のように述べている。

私は、この件をテレビで初めて知った。自宅の居間でのことだ。姉と父と一緒にいた。特に何かをしていたわけでもなく、何か食べながら評決を待つ様々な人々のグループをメディアがどのように取材しているのかを見守っていた。法学部生の評決に対する反応に焦点が当てられていたと思う<sup>260</sup>。

このような発言の非一貫性の説明の一つとして、「タイムスライス・エラー (time-slice errors)」の結果という可能性があると言われている。2回目の聞き取り調査で、被験者は、後で起こった関連する出来事を思い出して、「自分が初めてこのニュースを聞いた時」と誤って結びつけているのかもしれない<sup>261</sup>。O.J.シンプソン事件の研究で、学生たちが発言の非一貫性に関して聞かれると、多くは「どちらの出来事も起こったのだ、と主張していた」。研究者たちは、これらの学生たちが「求められている出来事ではなく、裁判に関連するニュースを知った時の出来事を報告している可能性がある」と仮説を立てている<sup>262</sup>。タイムスライス・エラーは、難民認定審判官が頻繁に遭遇する記憶変容のいくつかに対する説明となるであろう。

後続の諸研究が示唆するのは、被験者が衝撃的な出来事を単に知った場合とは全く異なり、そのような出来事に個人的に関与している場合、被験者の記憶の中心的要素（「場所、行動、その場にいた他者」）はより一貫性のあるものになり得るということである<sup>263</sup>。一方、本節の初めに言及した目撃者研

---

<sup>258</sup> 同上。

<sup>259</sup> 前掲注 230 Schmolck 2000, 41.

<sup>260</sup> 同上; 他の情動記憶 (emotional memory) の一貫性に関する研究の包括的レビューについては次を参照, R. G. Winningham, I. E. Hyman Jr. & D. L. Dinnel, 'Flashbulb memories? The effects of when the initial memory report was obtained' (2000) 8 *Memory* 209-16.

<sup>261</sup> 前掲注 232 Hyman, *Errors* 1998, 940; 前掲注 218 Brewer 1999; 前掲注 110 Herlihy 2002.

<sup>262</sup> 同上 Hyman, 940-1

<sup>263</sup> U. Neisser, E. Winograd, E. T. Bergman, C. A. Schreiber, S. E. Palmer & M. S. Weldon,

究は、直接的に経験した出来事<sup>264</sup>についての「現実」の「外傷的」な閃光記憶の典型的な例として引用されており、そのなかで示されている通り、被験者の細部に関する記憶の歪みは著しい。さらに、兵士、平和維持軍、犯罪被害者に関する研究は、実際に自ら経験した出来事の中心的要素でさえ、最も劇的な記憶変容の例となる場合があることを示している<sup>265</sup>。典型的な例として、砂漠の嵐（訳注：湾岸戦争）の帰還兵を帰国直後とその2年後に調査した研究がある。帰還兵はその戦争での経験について「はい」と「いいえ」で回答する19個の質問をされた。殺されたり、負傷したりした人を見たか、「著しく損傷した死体（bizarre disfigurement of bodies）」を目撃したか、「近しい友人の死を目の当たりにしたか？」などの質問である。88%の被験者が少なくとも1つの答えを変え、そして10分の1をわずかに下回る人（8%）が全質問のうち3分の1の答えを変えたのである（前述の3つの質問に関しては、答えを変えた人がそれぞれ27%、33%、8.5%であった）。答えの変更は、「はい」が「いいえ」になった者もあれば「いいえ」が「はい」となった者もある。被験者の70%は、最初の調査の際に経験していないと答えた出来事を2回目のインタビューでは経験したと答え、46%は初回には経験したと述べた出来事に対して2回目では経験したことを明確に否定した<sup>266</sup>。

トラウマの記憶に関する文献は、最初に述べたように本論文の分析対象から外れるが、これらの研究結果だけではなく、難民のヒアリングルーム内で[判断者が]直面する記憶変容を理解するためにも間違いなく極めて重要である。いくつかの前述の研究にはこのような記憶の変化と被験者の心的外傷後ストレス障害（PTSD）の関連を見出しているものがある一方<sup>267</sup>、他の研究ではPTSDとの重要な関係性は見つからなかったことも注目すべきである<sup>268</sup>。このことが示唆するのは、少なくとも他の心理的要因がこれらの記憶に作用している可能性があるということである。研究者たちはトラウマ以外にもこうした記憶の変化をもたらす「可能性のある数多くの説明」を提示している。例えば、被験者が「どのように自分が見られたいのか」という考えに一致する回答をしてしまう「社会的に望ましい変遷（processes of

---

'Remembering the Earthquake: Direct Experience vs. Hearing the News' (1996) 4 *Memory* 337-58 at 338; N. Er, 'A new flashbulb memory model applied to the Marmara earthquake' (2003) 17 *Applied Cognitive Psychology* 503-17.

<sup>264</sup> 前掲注 247 Pillemer 2009, 132.

<sup>265</sup> S. M. Southwick, MD, C. A. Morgan III MD, A. L. Nicolaou, PhD & D. S. Charney, MD, 'Consistency of memory for combat-related traumatic events in veterans of Operation Desert Storm' (1997) 145 *American Journal of Psychiatry* 173-7; I. Bramsen, A. J. E. Dirkzwager, S. C. M. van Esch & Henk M. van der Ploeg, 'Consistency of self-reports of traumatic events in a population of Dutch peacekeepers: Reason for optimism' (2001) 14 *Journal of Traumatic Stress* 733-40; S. Wessely, C. Unwin, M. Hotopf, L. Hull, K. Ismail, V. Nicolaou & A. David, 'Stability of recall of military hazards over time' (2003) 183 *British Journal of Psychiatry* 314-22; 前掲注 236 Schwarz 1993; L. Roemer, B. T. Litz, S. M. Orsillo, P. J. Ehlich and M. J. Friedman, 'Increases in retrospective accounts of war-zone exposure over time: the role of PTSD symptom severity' (1998) 11 *Journal of Traumatic Stress* 597-605; K. E. Krinsley, J. G. Gallagher, F. W. Weathers, C. J. Kutter & D. G. Kaloupek, 'Consistency of retrospective reporting about exposure to traumatic events' (2003) 16 *Journal of Traumatic Stress* 399-409. 特にレイプの記憶は、他の不快な記憶に比べて「閃光的（flashbulb）」でないことが分かっている。前掲注 245 Fivush 2009, 166.

<sup>266</sup> 同上 Southwick 1997. 研究者の中には、最初のテストを遅らせた方が、記憶に一貫性が出るのではないかと指摘する人もいる。: 前掲注 260 Winningham 2000. しかし、ある研究では、最初のインタビューを戦場から帰国して丸3年後に行った、同様の結果が得られている。同上 Southwick 1997 と同様に、この最初の遅らせたインタビューと1年後の2回目のインタビューの間に、回答者の88%が少なくとも1つの回答を変え、12%が4分の1以上を変えているのである。同上 Bramsen 2001.

<sup>267</sup> 同上 Southwick 1997; 前掲注 265 Roemer 1998.

<sup>268</sup> 前掲注 265 Bramsen 2001.

social desirability)」、時間の経過によって同じ質問を違う意味に解釈をする可能性、かれらの答えが「文脈、気分や注意の払い方」の違いによって変わってくる可能性、もしくはかれらの記憶はメディアの報道などの「事後の情報」によって影響を受けている可能性などである<sup>269</sup>。これらの記憶変容の原因が何であれ、衝撃的で心をかき乱すような出来事の記憶であっても、重大な変化を免れないことは明らかである。

難民申請者の供述が変遷した場合、難民認定の判断者は質問した点に関する記憶の正確性に疑問を持つかもしれない。しかし、目撃者研究は、証言の一貫性が「全体の正確性を示す大きな判断材料」とはなり得ないことを示している<sup>270</sup>。最も一貫している目撃者の証言が、最も正確であると確実には言えないのである。その理由は2つある。1つ目に、出来事のある側面を大きく誤って覚えている人でも、他のことは鮮明に覚えていたりすることがあげられる<sup>271</sup>。2つ目に、人は重要な詳細な部分を誤って覚えているとしても、状況の大枠を正確に記憶することができるからである<sup>272</sup>。IRBの委員が難民認定のヒアリングでこのような変容に注意を向ける場合、問題となっている供述の正確性にほとんど関心を持たない。車の色が赤か青か、車種がシバルレーかファルコンかなどは、通常、重要視されないのである。その代わりに、難民認定の判断者は申請者の供述が変遷したという単純な事実だけに目を向けて、それが申請者の信憑性について何を意味するかに関心を持つのである<sup>273</sup>。しかし、これらの多くの研究が示しているのは、記憶のありふれた不具合であり、申請者の誠実さの欠如を示すものではない。

驚くほど安定的な記憶を持っている人が極一部にいるものの<sup>274</sup>、ほとんどの人にとって重大な記憶が変化することは一般的であり、それは十分に実証されている。この点を踏まえると、このような記憶変容がなぜ、どのような状況下で起こるかについてさらに多くの知見が得られるまでは、難民認定の判断者は申請者の供述に矛盾があることを理由に、申請者が正直に話をするのでない嘘つきであると機械的に仮定することできないのである。

### 3.4 実験環境に関する注意 (A note about test conditions)

多くの場合、難民申請者は、前述の一貫性に関する研究のほとんどの被験者にはない2つのアドバンテージがある。まず、難民申請者に有能な弁護士がついていれば、前もってそれまでの発言内容を確認しておける可能性が高い点である。この点で申請者の供述の変遷は減る可能性があるが、しかし、この変数を統制した(訳注:「前回までの発言内容の確認」の回数や頻度を含めて統計的に調整し、比較可能とした)研究者たちによれば、それまでの発言内容を確認することが陳述の一貫性におよぼす影響は「極めて小さい」ことがわかっている。つまり、以前の供述を確認できることは、「申請者が、新しい

<sup>269</sup> 同上, 739.

<sup>270</sup> 前掲注 218 Brewer 1999, 311 (emphasis added); 次も参照のこと, 前掲注 209 Gilbert 2006; 前掲注 218 Fisher 1996; 前掲注 217 Smeets 2004.

<sup>271</sup> 同上 Fisher 1996, Brewer 1999, Gilbert 2006, 前掲注 33 Yuille 1986, 299.

<sup>272</sup> 前掲注 111 Bidrose 2000; 前掲注 22 Bluck 1999; 前掲注 110 Herlihy 2002.

<sup>273</sup> 最近の研究では、例えばスウェーデン移民局のメンバーは「ある程度大きな矛盾があること」(a relatively large degree)に根拠を置くことがわかったが、これは「単純すぎる」やり方ではないかと研究者は警告している; 前掲注 167 Granhag, Migration 2005, 43. 別の研究者が、彼の研究に参加した62人のうち2人を除く全員が2回目の面接で矛盾した供述をしたことについて述べたように、「事実上すべての証人の証言は、その真実性と全体的な正確さにもかかわらず、ある程度は信用されない恐れがある」と指摘している。前掲注 218 Brewer 1999, 310.

<sup>274</sup> 次も参照のこと, E. S. Parker, L. Cahill & J. L. McGaugh, 'A Case of Unusual Autobiographical Remembering' (2006) 12 *Neurocase* 35-49.

詳細な出来事を思い出す傾向を抑制しなかった」うえに、「直感的な予測に反して記憶を改善したり、明瞭にしたりするということもなかった」<sup>275</sup>。これはおそらく、前述したように、審尋 (in investigation) において自分自身の記憶を語る時に思い出そうとしているのは、「自身が実際に何を経験したか」であり、「前回のインタビューで何を話したか」ではないためであろう<sup>276</sup>。

次に、多くの研究の被験者たちが、[記憶の]テストとテストの間にほとんど考える必要のなかった出来事を思い出すよう指示されたことと異なり、難民申請者は繰り返し思い起こしてきた経験について語ることになる点がある (もちろん、多くの申請者は心の中から無理やり絞り出して供述するのである。それらは「思い出さないように忌避された記憶 (avoidant memory style)」として、人生でのネガティブな出来事に対する反応として広く研究されている)<sup>277</sup>。「めったに思い浮かべない事柄よりも、頻繁に思い起こしたり考えたりする事柄ほど鮮明に思い出せる」ことは十分裏付けられている<sup>278</sup>。ただし、ある記憶が他より鮮明であるからといって、その記憶が「他に比べて安定している」とはいえない。この変数を統制した(訳注：記憶の信憑性を調べるにあたり想起の回数を検討し統計的に調整した)研究者らによれば、頻繁に思い起こされる記憶でさえ、その重要な部分は変化するのである<sup>279</sup>。

研究結果が示唆するように、最小限ではあるが、前述の点が難民申請者にとって有利に働くものであるとしても、それらは以下の3つの深刻な不利な条件を踏まえた形で考えられなければならない。これらを総合的に考察すると、難民申請者の供述は、前述の研究報告よりも上であるかはともかく、同程度には一貫性がないものであると考えられる。

難民申請者にとって不利な一つ目の点は、難民認定の判断者が質問をする際に、記憶に関して質問する方法に一貫性がないことが常態化している点である。記憶に関する研究で用いられる質問方法には2種類あり、1つ目の「自由再生 (free recall)」は、記憶している内容を単にできるだけ詳細に挙げるよう指示する質問(「カナダでの庇護を求めるに至った主な出来事と理由をすべて述べてください」と)と、もう一つの「手がかり再生 (cued recall)」は、申請者が思い出せるように研究者や調査官が特定のヒントを与えて誘導する質問である(「それで、その人は何と言ったのですか?」、「その人はほかに何をしたのですか?」、「その場に誰か居合わせましたか?」)。数多くの研究で示されてきたように、異なるタイプのヒントは異なるタイプの情報を引き出すことになる<sup>280</sup>。したがって、「一貫性を評価するためには、正確に同じ方法によってなされるべきである」<sup>281</sup>。なぜなら「1度目と2度目で記憶検索に別々のヒントを用いると、それぞれ異なる記憶が現れることになる」<sup>282</sup>ためである。

---

<sup>275</sup> 前掲注 180, Turtle 1994, 226; 同様に次も参照のこと, 前掲注 111 Bidrose 2000. この研究によれば、この実験では、物的証拠を見直す能力が記憶に与える影響はほとんどなかった。

<sup>276</sup> 前掲注 170 Granhag 2002, 245.

<sup>277</sup> 例として次を参照のこと, D. Hermans, A. de Decker, S. de Peuter, F. Raes, P. Eelen & J. M. G. Williams, 'Autobiographical memory specificity and affect regulation: Coping with a negative life event' (2008) 25 *Depression and Anxiety* 787-92 at 787; 前掲注 3 Herlihy 2009, 184.

<sup>278</sup> 前掲注 181 Anderson 2000, 440; 前掲注 8 Betz 1997.

<sup>279</sup> 前掲注 181 Anderson 2000, 440.

<sup>280</sup> 次を参照のこと, Dunning 1992, 前掲注 206; 同様に次も参照のこと。前掲注 218 Brewer 1999; H. P. Bahrack, L. K Hall & L. A. Da Costa, 'Fifty years of memory of college grades: Accuracy and distortions' (2008) 8 *Emotion* 13-22; 前掲注 111 Bidrose 2000.

<sup>281</sup> 前掲注 251 Van Giezen 2005, 937.

<sup>282</sup> 前掲注 209 Gilbert 2006, 725; 同様に次も参照のこと。前掲注 218 Fisher 1996, 26.

一貫しないヒントの与え方は、記憶増進 (hypermnnesia) を著しく増加させてしまう<sup>283</sup>。日付については、大雑把なものでなく、正確な日時を求めると<sup>284</sup>かなり異なる答え<sup>285</sup>が返ってくるだろう。頻度についての回答は、「クローズエンドかオープンエンドな質問か」で変わってくる<sup>286</sup>。前述した通り、ある出来事がどの程度の期間続いたかについても、「質問の仕方」によって「かなり異なった期間」が回答される<sup>287</sup>。出来事の順序や実際に起きた一つ一つの具体的内容<sup>288</sup>、繰り返し起こった出来事<sup>289</sup>の例や会話の内容<sup>290</sup>などは、いずれも時間とともに薄れていく古い記憶であるため、自由再生よりもヒント（訳注：手がかり再生）があったほうがよりよく思い起こされる<sup>291</sup>。研究者は、こうした記憶の効果は、記憶検索方法が「対面の面接」から「自己解答型の質問形式」に切り替わるとより複雑なものになる可能性を指摘している<sup>292</sup>。

これらの知見に照らせば、犯罪捜査官は、可能な限り異なる情報を得ようとして、さまざまな検索手がかりの運用を習慣化しているといえるだろう<sup>293</sup>。また、自己解答式の質問表に記入された後に、対面インタビューを行い、手がかり再生の質問をするような方法ほど、大きな矛盾を生むような方法で記憶を尋ねるような設計をすることはできないだろう。

難民申請者にとっての第2の不利な点とは、時間の経過である。記憶の一貫性に関する研究のほとんどは、難民申請手続きにかかる平均期間よりも短い期間を研究対象としている。その中でも、研究者たちは2つの重要な「記憶の保持間隔による効果」<sup>294</sup>を発見している。すなわち、調査の間隔が長くなればなるほど、被験者は一貫した回答をできなくなる<sup>295</sup>、さらにオープンクエスチョンをされた場合は、ある出来事がすっぽりと記憶から抜け落ちてしまいやすくなることである。後者の影響で、「特別な出来事でさえも、全体として過小な報告がなされる」こととなる<sup>296</sup>。典型的な例として、被験者たちにこれまで入院の経験があるかを尋ねた研究では、「1～10週間前の入院について言及し損ねたのは3%だけであったが、1年が経過した後では42%が入院を報告しなかった」<sup>297</sup>。被験者にこれまでに「自分が負傷した自動車事故に遭ったことがあるか」を尋ねたある研究では、事故から3ヶ月以内の場合、事故に言及し損ねることはほとんどなかったが（4%）、9～12ヶ月前の出来事となると、4分の

---

<sup>283</sup> 前掲注 6 Cohen 1995; 前掲注 111 Bidrose 2000; 同上 Gilbert 2006.

<sup>284</sup> 前掲注 9 Janssen 2006; J. Huttenlocher, L. V. Hedges & N. M. Bradburn, 'Reports of elapsed time: Bounding and rounding processes in estimation' (1990) 16 *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 196-213.

<sup>285</sup> 前掲注 18 Loftus 1990, 332; 前掲注 52 Sudman 1984.

<sup>286</sup> 前掲注 47 Belli 1998, 384.

<sup>287</sup> 前掲注 67 Pederson 2002, 771, 773; 前掲注 65 Burt 1996.

<sup>288</sup> 前掲注 5 Burt, Time 2008, 134.

<sup>289</sup> 前掲注 6 Cohen 1995, 285.

<sup>290</sup> 前掲注 154 Campos 2006; 前掲注 159 Pezdek 1993, 305.

<sup>291</sup> 前掲注 13 Wagenaar 1986.

<sup>292</sup> S. Sudman & N. M. Bradburn, 'Effects of time and memory factors on response in surveys' (1973) 68 *Journal of the American Statistical Association* 805-15 at 815.

<sup>293</sup> 前掲注 209 Gilbert 2006, 735.

<sup>294</sup> 前掲注 101 Jobe 1993, 569.

<sup>295</sup> 例として次を参照のこと, 前掲注 110 Herlihy 2002; 前掲注 230 Schmolck 2000.

<sup>296</sup> 前掲注 47 Belli 1998, 384.

<sup>297</sup> 前掲注 109 Belli 2001, 46; 次を参照のこと, 前掲注 101 Jobe 1993.

1以上の被験者(27%)がその事故を報告できなかった<sup>298</sup>。失業期間<sup>299</sup>と犯罪被害<sup>300</sup>についても似たような結果が示されている。これらの研究の被験者たちは、2回目の実験までに自らの入院や自動車事故、犯罪被害の経験を本当に忘れてしまったのではない。忘れたのではなく、被験者たちのこうした出来事の記憶が、何らかの理由で自由再生の質問で思い起こされなかったのである。この点については、難民申請者と調査の被験者のどちらにとっても同じく明白な課題である。

難民申請者にとって第3の不利な点は、まさにヒアリングルームにおける「象の大群(訳注:厄介な事柄)」である。文化的、あるいはジェンダー的要因、トラウマ、ストレス、疲労、言語と通訳の問題など枚挙に暇がない<sup>301</sup>。ハーリヒー(Herlihy)とターナー(Turner)が指摘するように、ある経験を思い出そうとする難民申請者は「その出来事の説明を、社会的文脈や会話中の文脈のなかで構築している」<sup>302</sup>。記憶がどのようにして語られるかは、「社会的文脈の全体、つまりインタビュアーとインタビュイー、さらに面接の状況、が影響を及ぼす」<sup>303</sup>。ハーリヒーとターナーは、申請者のヒアリングにおける社会的文脈の多様な側面が、申請者の経験を思い出す能力を低下させると強調している。

カナダ連邦裁判所は、賢明にも「難民の地位の決定は、記憶力テストに基づいてなされるべきではない<sup>304</sup>」と述べている。万が一、難民認定の審査が記憶力テストに基づくものだとすれば、現在のような環境は全く公正とは言えないだろう。

#### 4. 結論

真実と偽りをめぐる研究において、虚偽を述べるように指示された被験者たちは、面接官を納得させるためにいくつかの戦略を用いたと報告している。「詳細な情報を盛り込む」、「本当でないことを言うのを避ける」、「作り話を貫く」、「作り話をあたかも自然に出てきたかのように見せるようとする」など戦略である。一方、真実を述べるように指示された被験者たちは、たった2つの戦略しか用いなか

---

<sup>298</sup> 同上 Belli 2001, 46.

<sup>299</sup> 前掲注 47 N. Mathiowetz, 'The problem of omissions and telescoping error: New evidence from a study of unemployment', Proceedings of the Section on Survey Research Methods (American Statistical Association, 1986) in Belli 1998.

<sup>300</sup> 前掲注 101 J. M. Bushery, 'Recall biases for different reference periods in the National Crime Survey', Proceedings of the Section on Survey Methods Research (American Statistical Association, 1981) 238-42 in Jobe 1993.

<sup>301</sup> 翻訳の問題については、次を参照のこと。、*Sherpa v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)* [2009] FCJ No. 665, この裁判で、裁判所は通訳者を「十分に正確で、判決を左右しうる事項に関して[難民申請者の]行った発言を正確に伝達する能力があった」と判断した。実際のところ、その通訳者は複数の場面で委員会側が申請者へ向けた質問を誤訳しており、「申請者の返答や説明を不正確に通訳し、申請者が述べていない言葉を足しさえしていた」にもかかわらず、である。さらに、通訳者は270回にわたって、申請者に対して翻訳を行う際に英語を使っており、通訳者はヒアリング中に[難民申請者は]通訳を理解するのに苦労していたようだとして認識しており、その理由を、申請者と通訳者の出身が異なっており、方言が違ったためとした(at paras. 23-4, 57)。

(訳注:カナダの公用語は英語およびフランス語であり、難民認定審査などにおいて申請者がそれ以外の母語を用いる権利は通訳によって保証される。当該裁判、「シャルバ対カナダ」裁判の原告シャルバ氏はネパール出身であり、カナダに難民認定を求めていたが、審査の結果、不認定とされた。裁判の争点は、英語を理解できない原告が、難民申請の信憑性を評価するためのヒアリングで英語を用いた不十分な通訳が行われたため、母語を用いる権利が保証されなかったとして、カナダ移民・難民委員会の不認定決定の取消を求めて提訴したものである。裁判の結果、通訳は陳述の信憑性評価に影響しなかったとして、原告が敗訴した。)

<sup>302</sup> 前掲注 3 Herlihy 2009, 179.

<sup>303</sup> 同上, 180.

<sup>304</sup> 前掲注 1 *Sheikh v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration)*, para. 28.

った。「真実をありのままに語る」、そして「協力的に振る舞う」ことである<sup>305</sup>。真実を述べた被験者の多くは、「自分は真実を語っているのだから、戦略など必要なかった」と報告している<sup>306</sup>。研究者たちにとって特筆すべき点は、こうした「単に正しいことを述べる」という正直者の戦略は「あまり役には立たなかったようだ」ということである<sup>307</sup>。かれらはしばしば嘘を言っていると思われたのである<sup>308</sup>。

前述したように、職業的に虚偽を見破る人々は、一般に「偶然のレベルをわずかに超える程度の成功率」しか記録しないが<sup>309</sup>、「自分の判断に過度に自信を持っている」<sup>310</sup>。難民申請の判断者は、典型的な複合的困難（compounding challenge）に直面しており、ただ経験を積むだけで、難民認定審査がより正確になることはないであろう。なぜなら、判断者は自らの審査結果が正しかったのかを検証できる機会がほとんどないため、自らの失敗から学ぶことほぼ不可能なのである<sup>311</sup>。スウェーデン移民委員会の委員（Swedish Migration Board Members）の信憑性を評価する能力が長らく向上しない（それにもかかわらず、委員たちは自分の判断に自信を深めていった）理由<sup>312</sup>、嘘を見抜く訓練をあまりしていない被験者たちのほうが、ある研究でより訓練を受けた人々よりも正確に嘘を見抜けたという研究結果が示された理由<sup>313</sup>、あるいは数多くの実験でベテラン捜査員のような嘘を見抜く仕事の経験が豊富な人々と大学生の信憑性を評価する能力に差がなかった理由<sup>314</sup>を説明するために、研究者たちは誤った判断に

---

<sup>305</sup> 前掲注 168 Hartwig 2007, 220.

<sup>306</sup> 同上, 224.

<sup>307</sup> 同上, 225.

<sup>308</sup> 「内心はかなり様子に現れるので見てわかる」し「無実ならばっきりわかる」というよくある考え、つまり「明証性の誤謬（illusion of transparency）」が、実際には無実の容疑者を危険にさらしているのだと研究者らは述べている。同上, 214; T. Gilovich, K. Savitsky & V. H. Medvec, 'The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional states' (1998) 75 *Journal of Personality and Social Psychology* 332-46; 同様に次も参照のこと。S. M. Kassin & R. J. Norwick, 'Why people waive their Miranda rights: The power of innocence' (2004) 28 *Law & Human Behavior* 211-21.

<sup>309</sup> 前掲注 168, Hartwig 2007, 213; 同様に次も参照のこと。前掲注 168 Granhag 2000; C. F. Bond Jr. & B. M. DePaulo, 'Individual Differences in Judging Deception: Accuracy and Bias' (2008) 134 *Psychological Bulletin* 477-92.

<sup>310</sup> 前掲注 169 Granhag 1999, 165.

<sup>311</sup> 研究者が警告している通り、こうした決定を行う側は「自らの行う信憑性評価が正しいのか、結果のフィードバックを受けることがほとんどない」。前掲注 167 Granhag, Migration 2005, 30.

<sup>312</sup> 前掲注 167 Granhag, Migration 2005; 前掲注 169 Granhag 1999.

<sup>313</sup> 前掲注 167 Strömwal 2003.

<sup>314</sup> S. M. Kassin, C. A. Meissner & R. J. Norwick, "'I'd know a false confession if I saw one": A comparative study of college students and police investigators' (2005) 29 *Law & Human Behavior* 211-27; B. M. DePaulo & R. L. Pfeifer, 'On-the-job experience and skill at detecting deception' (1986) 16 *Journal of Applied Social Psychology* 249-67; 次を参照のこと。P. Ekman & M. O'Sullivan, 'Who can catch a liar?' (1991) 46 *American Psychologist* 913-20 at 913. 例外としては、アメリカ合衆国シークレットサービスのエージェントらは、ある有名な研究において嘘を発見する正確さが平均よりも有意に高く、おそらくは「言葉以外」の諸々の手がかりにより重きを置くことを習得しているからではないかとしている。Ekman 1991, 上掲書; and P. Ekman & M. O'Sullivan, 'Who is misleading whom?: A reply to Nickerson and Hammond' (1993) 48 *American Psychologist* 989-90. その他の研究では、同様に「身振り」の手がかりに重きを置くほかの職業従事者も、平均以上に嘘を発見する正確性を記録してきたとされる。P. Ekman, M. O'Sullivan & M. G. Frank, 'A few can catch a liar' (1999) 10 *Psychological Science* 263-6. しかし、これらの研究の手続きに対する近年の批判として、こうした良い成績を残した被験者は実際のところある不当なアドバンテージを得ていたのではないかと示唆されている。次を参照のこと。C. F. Bond Jr., 'Commentary: A few can catch a liar, sometimes: Comments on Ekman and O'Sullivan (1991) 同様に次を参照のこと。Ekman, O'Sullivan, and Frank (1999)' (2008) 22 *Applied Cognitive Psychology* 1298-1300.

対するフィードバックがない状況で仕事上の経験を積むだけでは、嘘を見つける能力を高めることはできないという「フィードバック仮説」を提唱している。複数の研究で結論づけられた通り、ベテラン捜査員はより正確なのではなく、ただ単に自信があり、よりバイアスがかかっているだけなのである<sup>315</sup>。

本論文の目的は、難民認定の判断者が行う信憑性評価をより良いものにするための一助となることにある。嘘を見抜く仕事における能力を向上させる主な方法の一つは、「関係のない手がかりに気を取られないようにする」ことである<sup>316</sup>。難民申請者の供述に、食い違いや変遷がある場合、否定的に受け取られる場合があるが、こうした捉え方は誤った判断につながることが多いことは研究により明確になっている。供述における食い違いや変遷は、「極めて慎重に」検討されるべきである<sup>317</sup>。決して「機械的に処理されてはならず」<sup>318</sup>、決定的な点として、信憑性評価のハードルはより低く設定されなければならない。前述した記憶に関する諸研究において一貫している顕著な特徴は、研究者たちの求めるハードルがいかに低いかということである。記憶の研究者たちに言わせれば、「卓越した記憶力」も完璧には程遠く、変容は「避けられない」<sup>319</sup>。記憶の研究では、前回の証言と比較して20%ほどしか食い違いがなければ「高度な一貫性」を示したと言え<sup>320</sup>、直近10週間の間で起こった特筆すべき個人的な出来事を誤って記憶している割合が20%だけであれば「比較的良好な」結果を残したことになる<sup>321</sup>。しかし、これが難民申請者であれば、多くのIRBのメンバーは嘘つきと判断するだろう<sup>322</sup>。

刑事判事、検察官や警察官は、目撃者が信用できるかどうかだけでなく、その目撃者の記憶が信頼に足るかどうかを常に判断しなければならない。被告人が自由の身になれるかどうかは、その車が赤だったか青だったかにかかってくる。しかし、難民認定の判断者は「車は赤だったが、今は青い」（訳注：申請者の供述が変遷した）という事実が、真実を述べると宣誓した難民申請者は真実を述べるように、可能な限り努めているはずだという推定を覆すほどのものかを判断しなければならない<sup>323</sup>。記憶が

---

<sup>315</sup> 研究者らが「試験官バイアス (investigator bias)」と呼ぶこのバイアスは、虚偽のないところに嘘を見つけようとする傾向である。同上 Kassin 2004, 213.

<sup>316</sup> A. Vrij, 'Why professionals fail to catch liars and how they can improve' (2004) 9 *Legal and Criminal Psychology* 159-81 at 171.

<sup>317</sup> 前掲注 170 Granhag 2003, 864.

<sup>318</sup> 前掲注 167 Granhag, Migration 2005, 43.

<sup>319</sup> 前掲注 246 McNally 2003, 125, 117.

<sup>320</sup> 前掲注 33 Yuille 1986, 296.

<sup>321</sup> 前掲注 8 Betz 1997, 713.

<sup>322</sup> ヒアリングルームでの実態とは乖離しているとはいえ、「ハードルを低くする」ことはIRBの方針と合致しているとのだと付記しておく意義はある。IRBの研修資料は以下の事項を強調している。「留意せよ、宣誓を経た供述は真実であると推定される」、「申請者の記憶は完璧であると思ってはならない。ほとんどの、というより他のすべての人々と同じく、難民認定申請者はある種の情報を思い出すことができない。時間、日付、場所、距離、同時期の出来事や、自身の重要な経験でさえ、忘れてしまったり、時間経過によって歪められてしまうことがある」であったり、「申請者に過度に多くのディテールを求めてはならない、どんな出来事もそのすべてのディテールを知覚することはできない、もし申請者に過度のディテールを要求すれば、申請者は自分の思い出せないディテールを無意識に“補完する”ようになる」。Immigration and Refugee Board, 'IRB Questioning Techniques', undated, 13.

<sup>323</sup> カナダでは、この[証言者は真実を語っているはずだという]推定は法的効力を有している。Maldonado v. Canada (Minister of Citizenship and Immigration) [1979] FCJ No. 248. 難民に関する場合、このことが国際的に有する意義については次を参照のこと。M. Kagan, 'Is Truth in the Eye of the Beholder - Objective Credibility Assessment in Refugee Status Adjudication' (2003) 17 *Georgetown Immigration Law Journal* 367-415. ケーガン(Kagan)は次のように結論づけている。「(難民認定の)申請者に自らの“信憑性”を証明せよと強要するなら、難民の地位に関する条約が定める保護に事実上の限界を設けることになる。こうした限界設定は当条約で許可されてお



どのように機能しているのかをよりいっそう深く理解すればするほど、難民認定の判断者の判断もより良いものになるであろう。

- 
- i 本論文が分析対象とするカナダの難民認定審査では、各々が独立した意思決定者であるカナダ移民・難民審査会（IRB）のメンバーによって審理・裁定される。そのため、本稿では IRB のメンバー、および裁判官を指して、難民認定申請に対する決定を下す権限を有する“Refugee Status decision makers”という語を用いて「難民認定権者」と表現している。一方、日本では難民の地位の認定権者は法務大臣であり、難民申請者の審尋を行う難民調査官や難民審査参与員には決定権がない。しかし、本稿の内容は、筆者が「ここではすべてカナダの難民認定制度から例を挙げているが、本稿で指摘した点は他の国の難民認定制度にも同様に当てはまるだろう」と述べる通り、このような制度の違いを超えて、難民申請者の供述の信憑性を判断する立場にある難民調査官、難民審査参与員、裁判官など、すべての人に関連するため「難民認定権者」ではなく「判断者」と訳している。
- ii “testimony”は「証言」と訳される場合が多いが、難民認定申請の文脈においては「供述」の用語を用いることが一般的であるため、難民申請に関連している箇所では「供述」と訳した。関連して、“witness”も通常は「目撃者」と訳されるが、文脈上、供述する人である申請者本人を指していることが明らかな場合は、「難民申請者」または「申請者」と訳している。
- iii 本稿では、記憶に関する様々な実験や調査に参加している人を指して、“Subject(s)”や（research）“participants”という語が用いられており、原則として前者を「被験者」、後者を「（研究）参加者」と訳している。ただし、文脈上、難民申請者を指していることが明らかな場合には、混乱を避けるために「難民申請者」あるいは「申請者」と訳した。
- iv 特定の日付を正確に記憶していないことを理由に、供述の信憑性がないと評価され、難民不認定になった場合、迫害におそれがある出身国に送還される可能性があるためである。
- v カナダの難民認定審査においては、「事実を真実であると宣誓した場合、その真実性を疑う正当な理由がない限り、その事実が真実であると推定される」という原則が確立されている、詳しくは、IRB “Legal Services, “Assessment of Credibility” 2-63 を参照 [https://www.irb-cisr.gc.ca/en/legal-policy/legal-concepts/Pages/Credib.aspx#toc232] (2024年12月13日)
- vi 日本の難民認定審査において、難民申請者が供述を行ったり、判断者が質問をしたりする機会はその段階や手続きによって異なる用語が用いられる（難民調査官が担当する一次審査におけるでは「インタビュー」、一次の結果に不服申し立てをした場合に難民審査参与員が実施する場合は「口頭意見陳述・審尋」、裁判においては「本人尋問」）。本稿では難民認定審査のために申請者に対して聞き取りを行う機会を広く指して“hearing”の語が用いられているため、審査のいずれか特定の段階を指す用語との混同を避けるためカタカナで「ヒアリング」と記載する。

---

らず、かつ、真正な難民認定申請者にとっても如何ともしがたいものである。信憑性が難民認定の実際上の基準ではないと考えると、信憑性の立証が難民側の責任であるかのようにされれば、難民申請者がそれを立証できるようには思われない。むしろ、申請者の陳述は、実態として、庇護を求める者の難民認定が適正であると証明するための一手段なのである。こうしたことを鑑みると、難民認定は、申請者は真実を言おうとしているはずだという推定とともに開始されるべきであり、この推定は、信憑性を認めないに足る十分な理由がなければ撤回できない。」、374。